
忘我邸にて

十二匣

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

忘我邸にて

【Zコード】

N3175P

【作者名】

十一画

【あらすじ】

希望無き女子高生、虚祁優月特に将来への展望も無く大学生となり、唯一の趣味から所属する事にした同好会は残念な人外達の巣窟だった。これはそんな彼女がからかつたりからかわれたり、突っ込んだり突っ込まれたり、普通に日々を送つていれば出来ないであろう経験を糧とし成長（主に残念な方向へ）していく日常を描いた物語……の筈だったんだけど、何処かでどち狂った模様。何にせよ頭を使わず気楽に読める作品になる予定

開幕　虚祇優月の独白（前書き）

残酷、流血、獵奇描写が時折含まれます。苦手な方はご注意を。

開幕　虚祇優月の独白

「これから話す出来事はちょっと人を超えたヒト達と物凄く人を超えた人達ともはやヒトなんて存在なのかどうかすら信じられないモノと普通のヒト、つまりは私とのお話。

出てくる人達は一人残らず一欠けらの情けも無く真っ黒なのに話はどこまでも白黒つかず結局灰色のまま。

れっきとした形が在ったのは始めてだけ。段々と拡散して風呂敷は広がって気が付けば何処までも、境界線も見つからないうままでに曖昧模糊としている。

誰もが鼻で笑つて馬鹿にして苦笑を浮かべて、そんな反応を示す話。

当たり前だ。私だって当事者にでもなつて自分の目で見て体験でもしてこない限り信じられる筈がない。

それほどに荒唐無稽で矛盾していくて適当で曖昧であやふやで掴み所がない。そんなヒト達とヒトっぽいヒト達とヒト…とヒトと私のお話。

でも真実だからしそうがない。別に真実がこの世で一番重要だとか大切だなんて言つ氣は全く無い。大抵真実なんてモノは知らない方が良かつたと思わせる事の方が多いし、それに少なくとも真実と思える事は当事者の胸の中にだけあれば良い話だと思う。

だから別に私がこんな話を語る理由もなければ必要も何も無いんだけど、なんでこんな話をする気になつたのかといえばそんな気持ちを表す言葉は一つしかない。

そう、單なる気まぐれ。

第一幕 そうだ、旅行に行こう? side 虚祇

「旅行に行こう。」

唐突に、本当に何にも前触れ無くそう言ったのは玖韻先輩だった。
メンバーは何時もの顔ぶれ、私を含む6人。

場所は何時もと同じく玖韻先輩の家の一部屋。

ゲーム専用部屋と名付けられたこの部屋、極端に物が少なく黒い
円形のソファーに吸音マットを敷かれた硬質硝子の丸いテーブル。
照明は部屋の四隅に取りつけられたカンテラ型のランプが程よく
温暖色の光を放っている。

目の前のテーブル上にはダイスとキャラクターシートが散らば
っている。

「はあ? そう言つ事は月初めに言ひや、オーライサン今月あと三千円
で過ごさなあかんねんで?」

いち早く反応した霞桜先輩に玖韻先輩がニヤリと笑つた。

因みに今日はまだ七月三日。十分月初めだと思つるのは私だけな
か他のメンバーもそうだそだと頷いている。

「安心しなさい、俺の奢りだ。」

玖韻先輩が女性的過ぎる顔に男前な笑いを浮かべていた。

そもそも、私、虚祇優月ウツロギユヅキがこうして玖韻先輩の家に出入りするよ
うになつたのにはそれなりの理由があり出会いがあるわけなのだが、
それを語りだすと色々長くなるので今回はパス。

端的にあつた事だけを述べるなら、大学に入学 トラブル 知り合ひつ。となる。詳しくは機会があればまた語ろうかと。

さて、私が入学して約3ヶ月経つた七月三日。この日、何時ものように暇を持て余した私は、同じような理由で玖韻先輩の家に訪れていた何時ものメンバーでゲームに興じていた。
因みに今回行つていたのは T R P G それぞれが世界各国の国家元首となり、統一を目指すという内容だつた。

結果は頭文字がCで始まる国を選んだ太刀風先輩が核を撃つた為第三次勃発。ゲームオーバーとなつた。

深夜三時を越えた頃、その日のゲームも終わり、お茶を飲みながら反省会をしていた時、唐突に玖韻先輩が「旅行に行こう」と言い出したのだった。

玖韻先輩。本名 玖韻玲音キンレイン

本名かどうかは公式な書類を見せて貰つた訳でもないから知らないけれど、そう名乗つている。

女性のような名前だけど性別はれつきとした男性……だと思つ。何故思うのかと聞かれれば未だにどうも自信が無い。容貌が女性的すぎる所為だ。

何時も人を小馬鹿にしたような顔を浮かべて細長いメンソールの煙草を時折咥えている。ただし火が着いている所は見たことが無い。聞いた話だと煙草の煙は主流煙も複流煙も嫌いだという。ただ、口に煙草を咥えるという仕草が好きなんだそうだ。フロイト好きに聞かせればさぞ鬱陶しい解釈を述べてくれるんだろう。

ユングだつたかな?
それはさておき
閑話休題

詳しく話を聞けば玖韻先輩の親戚が純和風旅館を経営しているという。そこを今年若年層にも手を出そうと一部若者向けに改装し、モニターとして玖韻先輩に話しを持ち掛けたのだと言つ。

「そして、『口』が重要な所何だけぞ

」

一端言葉を切つて濃い田に入れた緑茶を一口。

「出発は明後日^{あさつて}」

その言葉に全員、といつても五人だけ私も含めて五人が顔を上げた。

「ちょい待ち、明後日でどないやねん?」

関西出身にしては何だか怪しい関西弁の霞桜先輩^{カザクラ}。

「そうですよ、何でそんなに急なんですか?」

敬語の鶯淵先輩^{オシブチ}。

「OH、そのとーりデスネ、玖韻先輩?」

自称日系一世のキース先輩。この人の喋りもじつも胡散臭い。と
いうか態^{わざ}とだ絶対。

「楽しみね、優月」

にっこりと、少々ねつとりと微笑みながら私を見てくるのは太刀^{タチ}
風先輩^{カゼ}。

「安心したまえ、交通費も奢りだ。」

「そう言つ問題じや無いですよーー!」

無いやろ？！」

無いテース！」

奇しくも3人の意見が一致した。
太刀風先輩は手を合わせて夢現ゆめうつな顔をしている。

「ゆづはどう、何か予定入ってる？」

そんな3人を無視して私に玖韻先輩が聞いてくる。

「いえ、大丈夫ですよ。」

彼氏や彼女がいる訳でもなく、知り合いはいても友人がいる訳でも無い私は見事に夏の予定がフルに空いている。

それが良いことか悪い事かはさておくとしても、少々悲しい。

「よし、それなら決定、集合場所は明後日の朝8時、JR福岡駅筑紫野口。OK？」

私もこの3ヶ月でこの先輩に細かい事を言つても通じない事は良くなかつている。

大きい事も通じない。

当然ながら私より付き合いの長い先輩方はそんな事熟知している訳で逆らいもせず、

「「「お～……」」

と力なく返事をしていた。

因みに太刀風先輩は夢見る少女つて歳でも無いのに今だ遠い目をしながらぶつぶつ言つていた。

合掌。

第一幕 そうだ、旅行に行こう？

一日後、私達は困っていた。

まだ朝の8時過ぎなのに日差しは私達の影でもアスファルトに焼け付けるかの如く照り付けてくる。

だったら駅構内で待つていれば良いという意見もあるのだが、待ち合わせ場所は駅入り口。それに私は駅構内に漂う名物らしきお菓子の甘つたる「ココア風の臭い」が実に苦手なのだ。

「……遅い。」

背中で鳳凰と竜が噛み合つ何とも末期的な柄のシルクシャツを着た霞桜先輩が呟く。

アイボリーのリネンジャケットを肩に掛け、何時もと変わらないオールバックにサングラス、開襟シャツの太い首や手首に光るゴツイゴールドアクセサリーの姿はどこからどう見ても、一切の弁解の余地無くシネマの中にしか存在しなさそうなヤクザだ。

さらに腰に挟み込まれたどう見ても銃にしか見えない物に関しては違和感が無さすぎてツツ「ゴミをいれる気も起こらない。

とりあえずその手に下げたジュラルミンらしきスーツケースと自分の手を手錠で結ぶのだけでも止めてくれないものだろうか？

「まったく、暇つぶしに誰か襲つたるか……」

不穏な言動も何時もの事なので聞き流してキース先輩と鴛淵先輩に顔を向ける。

キース先輩、本名キース・サガラ相良・アウレリウス

特徴はその目立つ緩いカールの掛かった砂色の金髪と青い瞳。

どこからどう見てもアングロサクソンな外見なのに日系一世と妙に強調する変な人だ。慣用句や諺が好きなのかよく使うけど、どれも微妙に間違っている。本気なのか洒落なのか区別が難しい所だが、偶々街中で出逢った子供連れの教授に「子はカスが良い（子はかすがい）」とか真面目な顔で言っていたからかなり胡散臭い。

何にせよ喋り方といいそのキャラクターといいどうにも嘘くさい人だ。

それにしても仮に日系一世だとしたら何処の人とのなんだろう。個人的意見としては名前の語感から考えるとギリシャ系の気がするけど……あんまり興味無い。

一人で何を話しているのかは知らないけど随分盛り上がっている様子だ。そのまま私は視線を横にずらすと太刀風先輩が目に入る。

太刀風先輩、本名 タチカゼナギナ 太刀風凪那

セミロングの赤い髪と塗れた様に光る一重の目。美人で何処となく冷徹な空気が漂い悪役な雰囲気が漂う。黙つて腕でも組んで立てれば同性にも関わらず、嘆息を漏らす程に格好良い人だけど、内面は結構イタイ。何しろ可愛い娘に見境が無くて妄想癖があつて多情だからもう救いようが無い。始めて合つた時、最初は何だか良い人で気を許していたら二人きりになつた瞬間襟首を掴まれ何をされるのかと身構える間も無くキスされ「ねえ、オネエサンと48時間耐久ペッティングしようか?」と笑顔で語尾にハートマークが付きそうな程に明るい口調で言われた時は霞桜先輩と違う意味で恐かった。

今の所毒牙にはかかっていない。

少々……思いきり身の危険を感じるけど、割合良い人だ……と思う。

因みに太刀風と言えば江戸時代にいた力士の名前らしいけど、何にも関係はないそうな。

どこの国のスマウレスラー、タチカゼなんたらとも関係無いそ
うな。

そんな太刀風先輩が呆気に取られたような顔をして何処かを見ている。

「太刀風先輩、どうかしたんですか？」

何時もなら「なぎりんつて呼んで」とかイタイ返答が返される筈なのに今回は無言で視線の方向を紅いマニキュアが丁寧に塗られた指で指差す。

太刀風先輩が無言で指差した方向を見て、私も思わず口が開いた。

「あれ、二人ともそんな顔してどうしたんです？」

鶯淵先輩が話しかけてくるので私も太刀風先輩に見習い無言で指差すと、そちらに顔を向けた鶯淵先輩とキース先輩の顔もぽかんと口を開ける。

「何や、どないしたん皆で罵廻面下げて？虫入るで？」

私達に話しかけながら霞桜先輩も顔をそちらに向け、そのまま呆気にとられた表情を浮かべる。霞桜先輩だけじゃない。通りを歩く人達も、駅から出てきた人達も足を止めそちらの方向に顔を向けひそひそと言葉を交わしたり呆気に取られたような顔を浮かべている。その方向には一人の女性がいた。

ただ、何と言うか、取りあえず朝の駅前にいるのはどこまでも場違いな人には違いない。

顔だけを見れば、文句の無い美人。（うなじ）頃の所で結わえられた艶やかで真つ黒な髪、向こうが透けて見えそうな程に白い肌、切れ長な目の上を縁取る様に蒼のアイシャドウ、唇は深紅。最近流行の化粧じゃないけど美人としか言い様がない。耳には小さく蒼いサファイアらしきピアスが光っている。

そんな美人が一人物憂げな表情で未亡人御用達なんて言葉がピッタリくる黒いレースの日傘をさしてそこにいた。

しかし、いくら美人でもそうそう人が足を止めしげしげと見たりはしないだろう。が、それもその井出達いでたちによる。

人一人簡単に入りそうな巨大なトランクに足を組んで腰掛けた、それだけでも目立つのにその上女性はチーパオ姿だった。

足の方から胸元に向かつて渦を描く白蛇が刺繡された金縁取りの漆黒なチャイナドレス。限りなく深く入ったスリットからは真っ白な細い足が惜しげも無くさらされている。

同じ様に白く細い腕にはブレスレット、爪には青いマニキュアが塗られ細身の指輪を嵌めている。

そんな美人がトランクに足を組んで腰掛け物憂げな表情を浮かべ日傘をさしながら長煙管で煙草を燻らせているのだから目立たないワケがない。

……ここは日本よね？

左右を見るまでも無く南の日差しが暑い福岡のそれなりに中心都市。

決して高級娼館とか阿片窟じゃない。
似たような店は沢山あるけど。

「……先輩？」

「……何かしら？」

「……よだれ拭いて下さい。」

太刀風先輩が慌ててハンカチで口元を拭う。美少女だけでなく美女も守備範囲のようだ。

私達がそんな会話をしていると横から「OH……ビューティフル……」とキース先輩の声が聞こえてきた。

と、その美人が此方を向き、「ひとつ（花が綻ぶ）」という慣用句（以前キース先輩は「花が朧昆布」と言つた）がぴたつと来るような笑みを浮かべる。

「ハウンッ！」

そんな声を上げながら頬を赤く染め胸を押さえ、さらに膝をつく太刀風先輩。

そんな先輩はさて置き、その美人は猫のよつた仕草で華麗にトランクから飛び降り、その大きさにも関わらず軽がるとそのトランクを引っ張りながら此方に歩いてくると私の前に立つた。

細い体形の割に身長は思つたより高くて私が見上げる格好になつてしまつ。

「ハオ
好？」

女性は何故か私に向かつて二二二二と笑いながら綺麗な発音の北京語でそう話しかけてくる。

「に、にーはお。」

慌てて答えてから助けを求めるよと太刀風先輩に顔を向けるが……いない。周りを見ればキース先輩も霞桜先輩も鶯淵先輩もどこにも見当たらない。

後から視線を感じて振り向けば皆で地下鉄入り口に隠れ……

というか思いつきりはみ出でているので隠れられていないのだけど

とにかく地下鉄入り口のにしゃがみこみ通行の方々の邪魔をしながら、口々に小声で何か言つてくる。勿論内容は聞こえないけど、何となくこの3ヶ月での事からで想像はつく。

多分「頑張れツ」とか「負けるなツ」とか、拳句の果てには「押し倒せツ」とか言つてゐるんだろう。

助けて貰えられそうに無い事に少しヘコみながら中国系美人に顔を向けると二口二口と笑みを浮かべたまま早口に何か日本語じゃない言語でまくし立てられるが、分かる筈がない。

こんな事なら必修の第一外国語で中国語を取つとけば良かった……なんて一瞬の混乱の為に一年の苦行を得てしまつようやく馬鹿な事を思つたりしたけど、今はそれどころじゃない。

少し冷静になろう。

私の知つてゐる中国語は？

「我愛？」

和訳すると（愛しています）この場面で言つたら只の罵迦だ。この美人のお姉さんが太刀風先輩と同じ属性というか嗜好の人だつたら洒落にならない……かもしねれない。

「我的愛人」

和訳すると（愛しい人）

同じだツ！

思わず自分に突つ込んだ。

「えーとですね、その……アイ、キャント、スペーク、チャイ一
一ズ……」

幾ら考へても単語しか浮ばず、必死の思いでそれだけ怪しい英語を言つた私の思いは天に通じた。

「あー、そうでしたか。私、少し日本語出来ます。」

……助かつた。

……とか日本語できるなら始めから話してよ……

腰が砕けそうになる私にお姉さんの笑顔が眩しい。

「何だ、日本語話せるじゃないの」

その声に振り向くと何時の間に来たのか太刀風先輩が腕を組んで偉そうに立っている。

「いや、面白い見世物やつた。」

霞桜先輩が相変わらずのミュートが掛かつたトランペッタのような妙な声で言い、キース先輩鷺淵先輩がうんうんと頷く。

先輩、もつと早く出てきて下さい。

非難がチョモランマより高く積もった私の視線も気にせず、太刀風先輩がお姉さんに問い合わせていい。

「それで、何が用?」

その言葉にお姉さんが少し眉を顰めて尋ねてくる。

「えと、私時計無い、何時?」

……多分コレは「私は時計を持つていません、今何時ですか?」と聞きたいのだろう。

しかし……私は思わず上を、お姉さんの頭上を見上げた。

そこにはビルの電光掲示板に設置された巨大なデジタル時計。だが、ここでアレを指示する事は簡単だけど、折角聞いてきたのだから教えて上げよう。

「今は8時20分ですよ。」

私の言葉にお姉さんの顔が曇る。

「」「ハツ虚祁、お前何を言つた？！」

「なつ何も言つてませんよッ！つていうか可愛い後輩が困つている時はさつまと隠れたのにこのお姉さんに対してはそういう態度を取るつてあんまりじやないですかッ！？」

「可愛くないッ！」

断言された……

「否、言いなおしたる。お前は一般レベルから見たら十分可愛い、美人の部類に入る事は間違ひ無いやろう。しかしあ、それも時と状況と場合によるんや、オマエがこのお姉さんより美人やつたらちゃんとオマエの肩持つたるわ、即ちオマエの美に対する修行がたりんツ……！」

ビシイツと私に指を付きつけながら霞桜先輩は堂々と言い放ち、キース、鶯淵両先輩はまたもウンウンと頷いている。男つて酷い。

「ちよつと、それは言い過ぎだよ。」

「太刀風先輩……」

すいません太刀風先輩、多淫症だとかイツちやつてるだとか、妄想癖だとか前世女だとか思つて……もう絶対……いや多分……それなり……ま、アレです。思考は自由ですしね。

「確かに優月は美に対する修行が足りないけど、でもそれを補つて

余りある…………」

と太刀風先輩が私をゆっくりと上から下まで舐める様に見た後お姉さんの方をまた上から下まで舐める様に見てからもう一度私を上から下まで舐める様に見て一言。

「…………まあ、あれかしら。今回はカスミンの言い分の勝ちね。」

…………泣いてやろーかな。

そんな私達を美人のお姉さんが「一二三」と見ている。

「姉さん、とても仲が良さう。」

…………いえ、否定はしませんよ。本格的に人間関係にヒビが入つてればこんな軽口叩けませんから。

お姉さんに話しかけられた事を切っ掛けに美に対する問答は取りあえずお開きになつたようだつた。

「どうしたの、誰かと待ち合わせ?」

太刀風先輩が取り繕う様にお姉さんに問い合わせると途端にお姉さんが嬉しそうな顔を浮かべ「ハイ」と言つ。

それにもしても、遠目に見たときは何だか美人でも陰の気が漂うような人だと思ったのにこうやって近くで見ると優げではあるものの陰なんて欠片もない人だ。

「もしかして恋人とか?」

その言葉にお姉さんは頬を赤らめ俯きコクリと一つ頷いた。

…………どうでも良いけどこんな仕草が嫌味無く似合つ人からは美

人税とか徵収するべきだと思つ。でも徵収されなかつたらそれもそれで悲しい。

「私、名前、リー ホア言います。実は恋人に結婚ノ準備出来タ、来てほしい、言ワレテ……」

とまた頬を赤らめ俯く。

それにしてもこんな美人のお姉さんを待たすなんて誰だか知らないけどその男良い度胸だ。

そんな考えは先輩方も同じだつたらしく霞桜先輩は明らかに憤慨している。鼻息が荒いから間違いない。そして怒りのあまり口から炎でも吐き出しそうな太刀風先輩をキース先輩と鶯淵先輩がどうどうと馬でも宥める様に宥め「アタシは馬かッ！」と蹴られている。ピンヒールブーツだから絶対痛い。

傍から見たらさぞ異様な集団だらう。

あんまり客観的に自分達の姿を考えると逃げたくなりそうなので、出来るだけ考えない様にしておいてリー ホアさんに話しかける。

「あの、リー ホアさんの恋人つてどんな人なんですか？」

「聞イテくれますか！」

嬉しそうにリー ホアさんが目を輝かせた。

何て言うか可愛い人だ。私が男だつたら放つておかないだらうと思つ。

「格好良イ人デス。何時モ黒い服を着ていて、本沢山讀んでいます。

」

……本沢山讀んでいて、黒服ねえ。

先輩方と顔を見合わせると皆微妙な表情、一人物凄く見知った人物でそういうのが一人いる。といふか玖韻先輩だ。そう言えば玖韻先輩も遅い。もう8時半を越えている。

「ソレー料理作るの好キテス、胡弓も演奏してくれマシタ。」

先輩方と私の顔が益々微妙な物になつて行く。

料理も、胡弓に限らず弦楽器演奏も数ある玖韻先輩の特技の中でも十八番だ。

「アノ人に見詰められただけで私モウ体ガ熱クテ、思イ出シタダケデモ……アン」

「ちょ、ちょつとー。」

私は何の因果で朝から身悶えする美人の中国系お姉さんを止めているんだろう?

そんな事を考えながら慌ててお姉さんを止める。

「ヤダ……ハシタ無イ」

お姉さんの顔が益々赤く染まり俯く。

太刀風先輩はもうメロメロだ。お姉さんに「死んで」とか言われたら自分で息を止めて窒息死するぐらいの事をやつてのけると思う。逆に「殺して」なんて要求されよう物ならマーダービーるかエリミネイターになる事ほぼ確定。

「あの、その人何て名前何ですか?」

その質問に先輩方の視線が集まる。

「ハイ、あの人ハ……」

「あの人は？」

「…………ククククク…………ハハハハハハハハハハハハツ」

と突然天下の往来にも関わらずお姉さんは笑い出した。
私達は呆気に取られる。

何がおかしいのかお姉さんはトランクをばしばし叩きながらまだ笑うのを止めない。とその時「あーッ！！」と太刀風先輩が大声を上げ何事かと顔を向けると口元を押さえ、目を見開きながら震える手をリー ホアさんに向け一言。

「……まさか、玖韻先輩？！」

？

何故か太刀風先輩はリー ホアさんを指差して玖韻先輩と言つている。

つまり、玖韻先輩＝リー ホアさんと太刀風先輩は認識した。

うん、この人駄目だ。前々から少々イッちゃつた先輩だとは思つていたけど、とうとう一線を越えてしまつたらしい。

「…………太刀風先輩、私雀医者とか紐医者しかいないけど取りあえず看板は精神科の病院知つてますから……」

そんな台詞を口に出した時。

無理矢理笑いを押さえながらリー ホアさんが言つた言葉に私達は再び目が点になつた。

「フフ、君らも少し洞察力を磨くべきだね。」

私も含む五人が涙まで浮かべて笑うリー ホアさんを凝視する。

「ちよいと、まだ分からぬの？」

分からぬにも何も悪い冗談としか思えない。現に声も完全に女性の声だ。

「そつか、声庚さんとなあ」

と言いながらリー ホアさんが首に手をやつ一回程「キキキキと鳴らす。

「ほり、コレで信用しただろ? いや、中々面白かった。ゆづの狼狽具合とかゆづの狼狽具合とかゆづの狼狽具合とかな。」

「全部私じゃないですかッ! て、そんな事より本当に玖韻先輩なんですか? !」

「だからそう言つてるだろ、まったく先輩を信用しないなんて悪い後輩だねえ。玲音哀しい!」

と完全に何時もの声に戻つたかと思いきや、またさつきとは違う女の子の声になつて玖韻先輩が私の頭をぐりぐりとやつてきていた。

「…………えーと…………玖韻、言いたい事は色々ある。」

目が点の状態から漸く戻つた霞桜先輩が口を開く。

そうだ、言いたい事は山ほどある。これには皆同じ意見だったのか太刀風先輩と私も続いてうんうんと頷く。

ずいっと音が聞こえそうな威圧感と併に霞桜先輩が一步前に出る。そして一言。

「何も言わず俺と結婚しいひん？」

私達は駅前で盛大にこけ、霞桜先輩の頬には玖韻先輩の幻の右が入っていた。

第一幕 そだ、旅行に行こう? (前書き)

長野県に関しては何も含んでいませんよ?

第一幕 そうだ、旅行に行こう？

その後、列車の時間が迫つていると玖韻先輩に告げられ、急いで新幹線に乗りこみ（それでも駅弁とアルコールは買い込む）平日の所為もあってか空いている席を適当に陣取ると座り込み早速ビールを一缶空にした所で漸く玖韻先輩が今日の格好の理由を語り始めた。

その理由とは。

昨日の夜、李紅蘭特集をテレビでやっていたから。

その答えに何やら疲れた私は取りあえず眠る事にした。

夢の中でチャイナドレス姿の玖韻先輩に襲われたが、悪夢と直ぐに認識できない自分に少し危機感を覚えたり覚えなかつたり。

さて、私達が目指す長野県は結構遠い。まあ九州から本州のほぼ中央まで行くのだから当たり前の話もある。

生憎九州からの直通便は無い為、名古屋で乗り換えとなつた。

名古屋でもチャイナドレス姿の玖韻先輩は目立ちに目立つている。

……いやちょっと待てよ。改めて今日のメンバー全員の服装を見てみよう。

玖韻先輩は省略。 霞桜先輩も省略。

キース先輩。

B級洋画に出てくる胡散臭い博士みたいな緩くカールした砂色の金髪は後頭部の高い位置で結わえてサムライ風。よく一般的なイメージで伝えられる天草四郎時貞みたいな髪型だ、月代は剃つてない。高い鼻に緑色の垂れ目。物凄く善人的な顔なのに、格好ときたら白地に南無阿弥陀仏と墨痕隆々と書かれた着流し。足は草鞋。頭には菅笠。腰には刀の代わりに鉄扇。

いい感じに日本を誤解した典型的外国人。念入りな事に荷物は正絹かどうか知らないけど風呂敷包み。唐草模様が目に染まる。

太刀風先輩。

斑なく染めた赤い髪（地毛という噂もある）、サイバーなダークレッドのサングラス。どこから手に入ってきたのか首を捻りたくない露出度が異様に高い闇赤色のサービスにも程がある、タイトな露出狂予備軍的レザージャケット。胸元は大きく開き。ルビーが煌くシルバーのボディピアスが光るお膣も丸だし。水着に近いほどの露出度。

でも、夏なのにレザー……いや、いいんですけどね。

そして服には違いないけれど。ローライズにも程がありダメージにも程があるダメージジーンズ。アンダーへアが見えないのが不思議だ。剃っているのかも。下着が見えないのも不思議だ・・・まさか、穿いてないんですか？

捕まるのもそう遠い日じゃないかもしれない。

そして踵の高いコレも同色の編み上げブーツ。

何時も通りの格好。

つまり普段着。

……この人病気だ。

気を取り直して鷺淵先輩。

清潔感漂うシンプルなスラックスとアロハシャツ。ただし上下共々赤と黒の市松模様。被っているハンチングも同じ柄。履いている靴までもが同じ柄。良く見れば眼鏡のフレームや時計のベルトに文字盤まで……

この人も病気だ。

見ていると目がチカチカする。

柔軟な顔と余りにも似合わない。

つていうかこの格好で先輩達の中じゃ一番地味つて……

……訂正します、私以外全員目立っています。せめてここが真夜中のサークスとか深夜の摩天楼とかハロウインパーティーとか

だつたら違う意味で違和感ないかもしれないけど、ここはお昼の名古屋駅。夏の日差しが爽やかを通り越して鬱陶しい夏の名古屋駅 8 番ホーム。

今すぐこの場から逃げ出したい衝動に駆られるけど、何故か私の固有スキル直感が逃げたら危険と訴えかけてくるので踏みどりまつっている。

「階さん、発車時刻までもう暫くありますし、折角名古屋なのだからさきしめんでも食べませんか？」

鶴淵先輩の実用的な意見に皆で賛成してさきしめんを啜る。格好はともかく言う事は実に実用的だ。

それにしても……隣で油揚げの浮いたさきしめんを啜る玖韻先輩を見てみる。上下は無理としても四方八方何処から見ても一分の隙なく女性だ。外見だけじゃなくて仕草や雰囲気もといった抽象的な物も完全に女性だ。

実は男性ですといつて信用する人は……人じやないんだと思う。しかしそれ以上に気になるのが玖韻先輩の隣の巨大な古びた外見の黒いトランク。マリオネットでも入っているのかもしれない。

玖韻先輩なら「あるるかあん！？」とか言いながら人形を出しても不思議じやない。

「おい玖韻、ここから長野までどれくらいなんや？」

既に一杯目のタヌキを食べ終え一杯目の月見に入った霞桜先輩がそう尋ねる。時間はお昼時なのに先輩方のお陰で店内が妙に空いてる。店からすれば良い迷惑だ。

「そうね、後一時間半って所かしら？カザは長野には言った事無いの？」

因みにこの格好で地声は趣味に反すると今は女性の声になつていい。これも玖韻先輩の特技の一つらしい。聞いた話だと女性の声だけ何通りも出せるそうだ。男性の声もできない事は無いが、あまり低い声はそもそも出ないそうな。

どうでも良いけど霞桜先輩と玖韻先輩が並ぶとく中国系ヤクザとその愛人或いは似てないその娘って感じだ。その上私を挟まないで隣にキース、鷺淵、太刀風3先輩が立とうものなら戦隊モノの悪役幹部勢ぞろいつて感じになる。

このインパクトに勝てるヒーローは中々いない。

もつとも悪役つて大抵正義のヒーローなんてのよりインパクトが強い気がしないでもない。

「ああ、俺は京都より東に行つた事がないねん。」

「そうなの?、長野つて良い所よ、大きく中信、南信、北信の三つに分かれていてね、皆でそれぞれの地区を馬鹿にしあつて足を引っ張り合つてゐるの。」

玖韻先輩の話を聞いても何処が良い所なのかサッパリわからない。

「しかもね、国宝に指定されている松本城は農民の呪いで、天守閣が傾いたお城なの。コレは実話よ、明治時代まで傾いたままでちゃんと証拠写真も残つてゐるもの。」

……益々良さが分からぬ。

もつともそういう話が好きな鷺淵先輩は目を輝かせている。

そう、鷺淵先輩は怪奇収集という嫌な趣味がある。

そのラインナップも恐ろしい。

人魚や河童の木乃伊なんてキワモノからはじまつて、靈が振り向

くビデオとか絞首刑に使われたロープ。たうけい磔刑に使われた釘、京都の某水神を祭る神社から盗つて来た使用済み藁人形。

どこまで本当か分からぬようないよつたアイテムがごつそりと鶯淵先輩の部屋にはあるらしい。

将来の夢もイギリスはマン島の怪奇博物館を越える怪奇博物館館長。

応援はしません。

さて、きしめんも食べ終えて今度は特急に乗り込むと再び席はガラガラ。お陰で長野県は松本市まで私達はのんびりゆつたり快適に行けたのだつた。

第一幕 忘我邸一日目？

「トトトト

凸凹道を走っているのであるつ振動がお尻の下から伝わってくる。

「フロイデ・シェーネル・ゲッテルフルケン……」

前の席からは陽気に第九を歌う玖音先輩と霞桜先輩の声が聞こえてくる。外見は全く正反対の二人なのに趣味嗜好が合うつらしい。

「……先輩、私達ドコに行くんですか？」

「日本国内じゃないかしら？」

「ソーデス、バンバンジー細胞は馬と古来の人も言ってマース。」

それは万事塞翁が馬です。

そもそもバンバンジー細胞って何ですか？

ランゲルハンス島の親戚か何かですか？

そんなツッコミをキース先輩にする気力も湧かなかつた。今

の私達の状況を簡単に言うのなら、護送中の犯人だ。

松本駅を出た私達を待つっていたのは一台のマイクロバス。

柔軟な笑みと張りついた笑みの中間点を浮かべた壯年の運転手さんに言われるままにバスに乗つた後、渡されたのはアイマスクと手

錠。

アイマスクと手錠を装着された後バスは出発しかれこれ一時間が経とうとしている。

「ほら、まだ本格的にオープンしてないしそれに運転手サン視線恐怖症やから。」

と理由になつていいやつないなじやつな説明を受けて私達はバスに揺られている。といふかそんな人物を迎えて寄越すな。

「玖韻先輩……まだ掛かるんですか？」

「もう直ぐだよ、ねえ運転手サン？」

「はい、勿論でいります。どうか皆様あと暫く

と、バスが止まった。

「皆様、到着致しました。」

……色々言いたい事は在るけど黙つておこう。
バスから降りて手錠を外してもらい、アイマスクを外した私達は絶句していた。

「皆様、ここからは徒歩になります。」

笑みを含む運転手サンの声を聞いても私達はやっぱり絶句していた。

視界に入る限り森が広がりその中に一本細い道が見える。その森も爽やかさとか明るさなんて言葉とはかけ離れた森。うつそう鬱蒼としたとか陰陰滅滅なんて形容詞が相応しい森だ。

「あの、玖韻先輩？」

「どうかしたの？」

「一体僕等はどうに向かってるのかもう一度説明して頂けますか？」

鴎淵先輩が微妙な笑み、というには少々無理のある表情を浮かべて一人機嫌良さそうな顔の玖韻先輩に尋ねる。

「電車の中でも言つたでしょ、私の従兄弟が経営している純和風旅館へ忘我邸へまだボケるには早いと思うけど？」

「いや玖韻、今は若年性の急性痴呆症もあるいうからな、案外わからんもんやで？」

霞桜先輩が茶化す。

「そうですよ、もしかしたら悪名高いクロイツフェルトヤコブ病かも、楸ちゃん脳味噌スponジ状なの？変死したら検死解剖の時見せてね。」

さらに太刀風先輩も茶化す。

「OH……ミスター鴎淵、アナタの事は忘れません……三日ハ。」

さらにさらにキース先輩が茶化した後、何故か期待を込めた目で四人が私を見てくる。四人とは言つまでもなく鴎淵先輩と運転手サンを除く四人。

「コレは私も後に続いて茶化せと言う事だらうか？」
「どう様に太刀風先輩に目を合わせるとコクコクと頷かれた。」
「では一つ私も。」

「鴛淵先輩安心してください、元々影が薄いんですからいなくなつてもそんなに変化は…………あれ？」

笑顔で言つていたものの先輩方のイタタタたという表情に思わず言葉を止めた。

「さて、地雷を踏むとこうオチがついたトコで歩くとしますか。」

玖韻先輩が巨大なトランクをものともせず細い道を運転手サンの後について歩き出す。

「そうやな、誰かさんが酷い事いうから場が冷めてもうたわ。」

その後に続く霞桜先輩。

「ミス虚祁はジョークのレッスンが必要です……」

手を肩の辺りまで上げ首を左右に振る例のポーズをしながらキース先輩が続く。

「優月、あれはアタシもフォローできないわ…………」

慰める様に私の肩を叩いて太刀風先輩も続く。

……そんな、私の言つた事つてそんなに酷かつたんですか？

ポンッと後から肩を叩かれる。

嫌な予感を感じながらゆっくり振り向くと、そこにはアルカイックスマイルを浮べる鴛淵先輩の姿。

「虚祁…………僕は怒つてないからね…………決してよくも人の古傷抉つてくれたなこのクソアマ^{なぶ}髣つて犯して八裂きにして埋めてやるう…………」

……何て全くこれっぽっちも思つてないからね。」「

「え……本音でしょそれ？」

「あの……先輩、痛いです。」

ギリギリと、鶯淵先輩が虫も殺さぬと言つた笑顔のまま田は笑つていないと、いう器用な顔で、ギリギリと私の肩を掴む。

「でもね、僕のピュアでナイーブな心は虚祁の言葉でマリアナ海溝より深く傷ついたよ、『めんなさいは？』

ギリギリ

「……先輩、肩甲骨がみしみしつて……」

「『・め・ん・な・さ・い・は?』

ニッコリ

ギリギリ

「『めんなさい先輩、心から謝ります。だから、あの、そろそろ肩から手を離して頂けるとありがたいなあつて……』

ふつと肩から圧迫感が消える。

「それじゃ虚祁、僕らも行こうか。待つてくれるような人達じゃないからね。」

始めて逢つた時から全く変わらないアルカイックスマイル。

上機嫌で鼻歌、それもレッドツェッペリンの移民の歌を歌いながら足取りも軽い鶴淵先輩を見ていて私は昔霞桜先輩に聞いた鶴淵先輩のもう一つの名前を思い出していた。

微笑を浮かべし魔人、ゴッドスマイル鶴淵。どれだけ中二だよとか、イタイ人だとか思つたのは内緒だ。

なんにせよこの瞬間私の「今年度版怒らせちゃいけない人」に新たに鶴淵楸先輩は上位ランク入りしたのだつた。

因みに上位は全員先輩方だつたりする。

第一幕 お我邸一回目？

少々急ぎ足で後を追うこと数分、幸い一本道だったお陰で迷うことなく追い付いき、それから約一時間、私達はしりとりをしながら夏だというのにどこからともなく底冷えしそうな冷氣と濃密に漂つ何かの気配を浴びながら今だ一本道を歩いている。

「ハンプティ・ダンプティ」

「胃酸过多」

「た、たた……タキオン通信装置」

「今のは在りか？」

「う~ん公式ルールなら難しいトロロだけ、今回は良しつてしまつよ。」

「しりとつに公式ルールがあるんですか？」

「愚問ね、全世界正しいしりとりを広めよつの会、会長の友人が言つてるんだから。」

「玖韻先輩それ嘘でしょ？」

「あら、何でばれたのかしら？」

「られない方がおかしいと言つ物である。」

私の心中でキートン山田風のナレーションが流れた。

「玖韻…………オマエ俺達を騙していたんか？」

ショックを受けたような顔をした霞桜先輩とキース先輩。おかしい人達はわりとすぐ傍にいました。

こんな馬鹿馬鹿しい会話としりとりを繰り返しながらさらに三十分ほど歩いた頃、突如開けた場所に出ると、その建物は静かな威圧感を放ちそこに佇んでいた。

「……こも久しぶりねえ。」

そんな玖韻先輩の独白が聞こえてくる。

この建物の外見を一言で表すなら「」ほど的確に表した言葉は無いつて程の物をキース先輩が呟く。

「OH……ジャパニーズホーンテッドハウス、……」

つまりは、そういう外見です。

外見から見る限りは純和風建築の屋敷が眼前に広がっている。ただ、異様なのだ。

まず屋根の高さが一定じゃない。尖塔みたいに突出して高い所も在れば低い所もあり、横にも縦にも大きく一点を見ていると蠢いているような錯覚が起こりそうになる。異様なのはそれだけじゃない。冠木門を潜つた先から屋敷までくすんだ緋色の鳥居が神社の参道みたいにだんだん大きくなるよう等間隔建てられている。その上瓦葺の屋根からは真っ赤な細長い布を風も無いのにはためかせる旗が乱立している。旅館と言つよりは邪悪なモノでも奉る神殿のようだ。

「…………祟られたりしないわよね。」

玖韻先輩が日々暮す家屋を数十倍、下手をすれば数百倍悪化させた瘴氣とも感じられる気配に流石の太刀風先輩も不安そうに呟く。そんな中。

「これは、素晴らしい！」

一人感極まつた様に鶯淵先輩が大声を上げた。

「シユウ、君はその当たりがよくわかつてる。良い感じでしょ？
しかも今まで事故死事件死自殺者変死者合わせてもう直ぐ4桁。そ
の上怪奇現象の隠れたメツカと言われていてそのテのマニアには垂
涎の的なのよ。」

玖韻先輩が胸を張つて誇らしげに言い放つ。
そんな情報知りたくありません。

「けど、今回ここには泊まりません。」

「そんな、何故ですか？！」

みんながほつとしたのも束の間、一人喚く鶯淵先輩の首筋に目に
も止まらぬ早さで霞桜先輩の手刀^{てんびんばち}が、そして鳩尾にキース先輩の鉄
扇がめり込むのを私は見逃さなかつた。

「先輩、邪魔者は片付いたので続きをどうぞ。」

白目を向いた鶯淵先輩を何処からともなく……本当に何処から
出したのか不思議だけど、兎に角出した天秤棒^{てんびんぼう}に手と足を縛り付け
て霞桜先輩とキース先輩が抱いだのを笑顔で見ながら太刀風先輩が

玖韻先輩に報告する。

なんだかいいト「ないね、鴛淵先輩。

「別に邪魔でもなかつたんだけど、まあいいか。」

軽つ

「そう、それで泊まる所なんだけど

結局のところ玖韻先輩の話しを要約すると、宿泊する所は忘我邸だけど、口口には、この邪悪な神殿チックな屋敷には泊まらないと

いう事だつた。

つまりのところ、この屋敷は和風旅館（忘我邸）本館なのだそうだ。こちらの方は毎年固定客が（ビーウー客層かはあんまり聞きたくない）いるので別に今更新しい顧客を呼ぶ必要も無いという。そんな訳で私達がタダで泊まれると言うのはこの本館の裏手に新しく出来た忘我邸別館だといつ事だつた。

そして忘我邸別館前、私達は別の意味で呆気に取られていた。

「おい、玖韻」

「なーにカザ?」

「コレが別館か?」

「ええ、私の意見としては少し外見が爽やかすぎて不服なんだけど、別館は若い客獲得の為に造られたものだからしちゃうがないわね。」

別館の外見を的確にあらわす一言を再びキース先輩の咳きで紹介します。

「…………ホーンテッドハウス？」

「…………… 実に正鶴を得た一言ですはい。

私の背後に建つのが和風お化け屋敷なら、私の前に建つのは洋風お化け屋敷だ。

玄関は向こうになります。といつ運動手サンの言葉に錆色の煉瓦壁に沿つて歩きながらじっくりと建物を観察してみる。それ程高さは無く多分3階建てのこの建物、六角形を描いて建つていて。中心とそれぞの頂点に尖塔が建つていて見える。幸い本館ほど邪悪な感じはしない。どちらにしろ何となく妙な雰囲気はするけれど。ところで、気になる事が一つ。

「先輩、ここって新築じゃなかつたんですか？」

「ゆづ、誰が新築って言つたの、改築って言つたでしょ。」

はてそうだつたかな？

「それにしても改築つていうんなりもつ少し外見にも氣を配れば良かつたのにね。」

太刀風先輩が煉瓦壁を触ると触つた箇所がボロボロと崩れる。

「やだ、風化が始まつてゐるじゃない。」

「古い建物だから、それもじょつがないわね。」

「おい、寝てる間に崩れたりせんやろな？」

「大丈夫よ、見た目はともかく中身は最新鋭の設備で充満している筈だから……それが正しい意味で使われているかどうかはおいておくとしてもね。」

「どうにも違和感無さ過ぎて、本当に男なのか疑わしくなつてきた玖韻先輩が不穏な事を言つ。」

「それ、どういう事ですか?」

「あら、楸ちゃん気が付いたの?」

天秤棒からぶら下がつたままの鶯淵先輩が笑顔で答える。

「ええ、楽なのでこのまま運んで貰おうと思いましたが話しが面白そうだったので口を挟んでしました。」

ハハハと快活に笑う鶯淵先輩。

「ミスター鶯淵、気が付いたのなら自分で歩いてクダサイ。」

キース先輩が天秤棒を肩から下ろす……といふか落とした。

当然鶯淵先輩はまだ縛られたまま。イコールどうなるかと言えば鶯淵先輩は重力に逆らえず頭から落ちる訳で……

ドコツ

非常に鈍い音が聞こえる。

「どういつ意味も何もその通りの意味ね、少し前の事だけど、見えないところにお金を使つて言葉をそのまま素直に解釈して忘我邸の屋根裏と縁の下を全金張りにしようとして旅館潰し掛けたのが今

の忘我邸最高責任者だから…………って人に話を振つとて途中で寝るつてどーなのよ！」

玖韻先輩がずるずると霞桜先輩に引き摺られている鶯淵先輩にびしひしひ「ハリキしてこる。

「玖韻、コレは気絶しとるんや。」

霞桜先輩が冷静に間違いを正す。

それにしても今日の鶯淵先輩い「トコないな。

そんな事を思いながら歩を進めている時だった。

「玲音ちゃん……」

そんな高い声が聞こえ私の田の前を黒い影が横切ったかと思つとその黒い影は玖韻先輩に飛び掛つて行く。そしてギンッといつ金属のぶつかり合う音。

「レニ姉さん……」

「やだ、玲音ちゃん前会つた時より綺麗になつたでしょ、お化粧も上手くなつたし。もうお姉さん嫉妬しちやう。」

「そんなに褒めないで、恥かしいわ。」

「恥ずかしがらなくても良いじやない、私と玲音ちゃんの仲ですもの。」

高い声と共に飛び出してきた人物。玖韻先輩が「レニ姉さん」と呼ぶ人物と玖韻先輩は何故か戦つている。

レニ姉さんとやらは簫で、どう見ても普通の簫だ。多分世界で一番有名なネズミが、電気を出さない方のネズミが魔法で水汲みをさせていたあの簫。それを玖韻先輩は扇で、大きな房飾りが付いた絢爛豪華な扇で受けている。といつかその扇何処から出しました？

撃ちかかり互いの武器、と呼ぶには貧弱なモノが触れ合つたびに金属音が聞こえ、火花が散るのはもう「愛嬌としてもツツ」口笛ころが多いのは間違ひ無い。

完全に私達は取り残されている。

その後も聞いている限りでは微笑ましいレズカツプルのような会話を続けながらどう見ても本氣としか見えない動きで打ち合つている。その動きは素人目に見ても常人の動きとは思えない。けど、そんな事よりもとりあえず玖韻先輩の口調だけでもそろそろどうにかしてほしい。

「…………玲音ちゃん、腕を上げたわね。」

「そういっ…………姉さん！」そ…………」

二人とも細い所為かスタミナは無いらしく、数分ほどで青息吐息になり互いに抱擁している。

一人の動きが止まつたところで改めてレニ姉さんとやらの格好を観察して見る。小柄な身体、服の上からでも細くて華奢なのがわかる。

小さな顔にアイスブルーの瞳、桜色の唇、白銀色のむらむらな髪。年齢はどう見ても15歳が精々。でも、この際そんな可憐で愛らしいにも程がある美少女なんて外見はどうでも良……くは無いが置いといて、問題はその服装だ。銀色の頭の上に乗つた可愛らしい白のヘッドドレス。黒と白のシックなエプロンドレスに簫。その格好は誰が何と言おうがメイドさんだつた。少なくとも私はメイドさんだと認識する。

もし金髪だつたら名前は絶対にアリスだ。
その手の人には大ダメージ。

私は大丈夫。ちょっと着てみたいとは思うけど。

「…………玖韻、色々聞きたいことは在るんやけど、まず其方は何方いかわ
どなたや？」

抱擁し会つ二人に声を掛けたのはいち早く素に戻つたらしい霞桜
先輩だつた。その声に抱擁を解き一人が此方を向く。

全世界正しい意味でのミスコンー十代の部、十代の部優勝者一名。
そんな言葉が頭を過るが、一人は男性だと言つことを忘れてはいけない。

「始めてまして、何時も玲音ちゃんがお世話になつてます。」

「ペーりと可愛らしくレーニ姉さんが頭を…………姉さん？」

「私、忘我邸総責任者レニエル・オルフェウスと申します。」

私の疑問はおいとくとして、嫌な予感を覚えつつ太刀風先輩に目
を移す。そこには予想通り肉食獣の笑みを浮かべ涎を垂らしかねな
い太刀風先輩の姿。

「先ほどはお恥ずかしい所をお見せしました、玲音ちゃんに会つのは
久しぶりだつたので私つたらつい…………」

ほんのり桜色に染まつた頬に手を沿えもじもじとする。

その物理的な破壊力すら生まれそうなまでの可愛さに太刀風先輩
は暴発寸前だ。

「 そ、皆様いらっしゃりへども、忘我邸全従業員皆様方を歓迎致します。

」

レニエルさんが万面の笑みを浮かべる。

我慢できなくなつたのであらう太刀風先輩が飛びかかり、比喩でも何でも無く言葉通り飛びかかり、玖韻先輩に空中で撃墜されたのは数秒後のことだった。

容赦無い。

第一幕 忘我邸一日至?

「ツツツ

私の歩調に合わせて足の下から硬い音が聞こえてくる。

音を立ててているのは私の履いている靴の裏とぴつちりと敷き詰められた御影石、というよりも黒曜石みたいな石のパネルとが打ち鳴らされる音。石のパネルがひとりでに鳴ると言うことはそうそう無い。といつことは音を立ててているのは歩いている私であつてそれはつまり私の歩くと言う行動が音を立てているのだから、私の歩くといつ意思が音を立てているとまで思うのは果たして行き過ぎだらうか？

「行き過ぎね。」

突然後からのツツツツツに私は震えあがる、遠ざかる、降りむくを一度にやろうとしてその場で転ぶ。一応受身は取れたけど恥ずかしいことに間違はない。

「たつ太刀風先輩何時来たんですか！？」

玖韻先輩に撃墜されてから「」の従業員さん達に運ばれてベッドで延びていた筈の太刀風先輩がそこに腕を組んで立っていた。

着替えたらしくあの露出狂予備軍敵なレザージャケットは着てない物の、今着ている服も真っ当な服を一端バラバラにした後意図的に大部分取り去り再統合したような変態一步手前、服何だか布何だか判断に困る。これじゃあさっきのレザージャケットとどっちがまさか悩まさせてくれる格好だ。

「あら、愛しい優月のいる所海の底だらーがこの世の果てだらーがアルデバラン星団だらーがアタシがいなはづないでしょ」

なんかウインクしながらポーズを取つて言つてくる。
嫌になる程似合つているけどこんな服装が問題無く似合つていうのはそれだけで問題な気がする。

「……先輩、それ答えになつてませんよ。」

「所で優月は何してるの、確か夕食は七時からだつて聞いたけど。」

私の疑問は全くムシ。わかつている。」——ゆー人なのだ。だから一々突つかかれば疲れるのは間違い無くこっちなのは痛いほどに経験済みだけどそれでも何か言いたくなるのは私の業だ。
そんなに重くも無いか。

「……ちょっと中を見て周つていたんです。」

「ふうん、アタシも一緒に行つて良いでしょ？」

慌てて周りを見まわす。幸い周りには従業員の方々が何人もいる。暗がりとかに近づかない限りは押し倒される心配もないだろう。

「ええ、いいですよ。」

「ツ」ツ笑つて答える。

「……なんか気になるわね今の間が」

対照的に太刀風先輩は渋い顔をしているが、気にしない気にしない。

「あれつ？ そういえば先輩わつを私の考えていた事にツツコんでできませんでしたか……？」

「う、私は声に出して足音の考察をしていなかつた筈だ、なのに先輩は確かにツツコミをした。

「わう？ 気のせいよ、氣・の・せ・い。」

絶対に気のせいじゃない気がする。

心のメモ帳一十五頁太刀風先輩の欄に新たに一項目「NEW! サトリかもしけない。」が追加された。

今私が歩いている所は一階のホールに繋がる廊下の一つだ。このホテルは何だか面白い造りをしている。

まずこの建物、忘我邸別館。正式名称「眩量館」は真上から見ると正六角形を描いており地下1階2階を含めると5階建ての建物である。そして、角の部分が部屋になつていて宿泊できる部屋は1階と2階の壹號室から拾貳號室までの12部屋だけ。3階はさつき上がつてみたら空中庭園になつており部屋がある部分はそれぞれ赴きの違う花壇と簡単な休憩所になつていた。天井は透き通つた硬質硝子、かアクリル。

それは兎も角として面倒臭い造りをしている。

各階を結ぶ階段は中央ホールに設けられた螺旋階段一つだけ。そしてこの中央ホールをぐるりと囲う様に六角形を描く第一廊下。

その周りを1階2階とも食堂や遊技場といった各施設が囲みさらにその周りを囲う様に第一廊下。そしてその第一廊下を挟み大三廊下がそれぞれ客室に通じている。

「うう言えばあんまりややこしい作りには見えないかも知れない。

でも実際はややこしいのだ。何故かと言えばまず1階。入り口は中央ホールにある。つまりこの眩暈館に入るには一端地下に潜り螺旋階段を上がつて1階に入る事になる。そして円形の中央ホールから第一廊下への通用口は北側と南側の一箇所。そして六角形を描く第一廊下からは北側と南側を除く4箇所が通用口、それぞれの通用口が各施設に直接繋がつていて第一廊下へ出るにはどこか施設を通りしかない。因みに1階の施設はまず多目的ホール、レストラン、ビリヤード場、カウンターバーの四つ。

さて第二廊下がまた面倒臭い。それぞれ施設から出られる或いは入られるつまり第二廊下への入り口は四箇所あるけど、第三廊下への入り口は北側一箇所にしかない。そしてその北側通用口を抜けると目の前に壹と大きく書かれたドアが現れる。六角形の、眩暈館の頂点の一つであり、壹號室のドアの真正面に当たる。そして第三廊下はそれぞれ客室と客室の間を遮る様にドアが立つていて、そして何故かこのドアは一方通行なのだ。

どういう仕掛けかはわからないけど壹號室を基点として右回りにしか進めない。だから貳號室の入間が壹號室、或いは第二廊下へ行く為には一端參號室、肆號室、伍號室、陸號室の前を通り壹號室の前まで来ないと駄目なわけだ。

2階も基本的に同じ造りだけど、2階の第三廊下は構造が逆になつていて第三廊下の入り口は南側にあり…………少々面倒な話なのだけれど、つまり一階肆號室の上が陸號室にあたり、そこを基点として逆時計回りに一方通行になつていて。

地下1階に限つては何だか単純で螺旋階段を降りて南側に出れば眩暈館出口へ、北側に出れば大浴場へ繋がつていて。災害時の想定とかバリアフリーとか一切気持ち良い程に無視した人に厳しい設計だ。

で、今私と太刀風先輩は1階の第二廊下を歩いている。

「それしてもややこしい造りよね、内装も同じだから本当に眩暈

起こしそう。」

「そうですね、何だか同じ所を堂堂廻りしているみたいで、昔出掛けた榮螺堂を思い出しました。」

太刀風先輩に「渋いわね」と肩を竦められた。

「ねえ優月、晩御飯まだもう少し時間があるんだけど、ナインボールでもやらない?」

ビリヤード室の前を通りかかったのを良い事に太刀風先輩がキューで球を付く仕草をしてみせる。

「良いですよ、一勝負やりましょうか。」

早速一人でビリヤード室に入る。スポットライトのオレンジ色の光だけで照らされた室内に重厚な外見のビリヤード台が4台静かに鎮座している。カウンターに向かいメイド服の従業員さんに話しかけてキューと球を借りてくる。

それを手馴れた仕草で太刀風先輩が並べ、ブレイクショットをするかと思いきや、手を止める。

「優月、折角だから賭けない?」

「賭けません。」

艶つぽくもあり色つぽくもある太刀風先輩の笑顔に恐怖を覚え即刻断る。が、それをムシして太刀風先輩が言葉を続ける。

「じゃあ優月が勝つたら優月が前から欲しがっていた裸石のセット

買つてあげる。」

「

弱い所をついてくる。

「……太刀風先輩が勝つた場合は？」

「ヤリと物凄く悪い笑みを浮かべる。

「今日はね、朝から女装した玖韻先輩見たり、レーチャン見たりしちゃつたから血が滾ってるのよね。」

妙に真っ赤な舌が唇を舐める。

背中に戦慄とも恐怖ともとれるモノが走る。

「…………つまり…………それは…………」

遠まわしに夜の相手をしようと。

頭の中に天秤が浮ぶ。片方のお皿には裸石セット。出物のロイヤルブルームーンストーン、レインボームーンストーン、カボッシュョンカットを施されたスター・サファイアとスチールビー。もう片方のお皿には裸の私。

さあ考えよう。私達のメンバーでビリヤードをしに出掛けた事は何度がある。その際当然太刀風先輩もゲームに加わるが、そんなに上手じゃなかつた筈だ。私とサシで勝負して大体4対6ぐらいで私が勝つっている。

そんな情報を天秤に加味しながらじばし揺れ動いた結果。

「…………分かりました、その賭け受けます。」

私がそう答えた時の太刀風先輩の笑みをなんと表現したらいいだろう。それはまさしくヘカテかヘラか、はたまたバビロンの大淫婦かそれともリリスか、そんな笑みだった。

「…………因みに先輩、レニちゃんつてもしかして？」

「ええ、レニエル・オルフェウスさんの事よ。でもあの外見で一十五歳つて詐欺よねえ？」

華麗にブレイクショットを決め、いきなり全ての球を落し艶然と笑みを浮かべる太刀風先輩。

私はレニエルさんより太刀風先輩の腕前の方が詐欺だと思います。教訓、人間モノが掛かると強い。

第一幕 忘我邸一回目？

「そういえば先輩？」

「何かしら？」

どうやら先輩がツいていたのは最初だけだったらしくゲームを重ねるたびに腕は落ち、最終戦を終え辛うじて引き分けに持ち込みほつと一息つきながら私達は休憩していた。

「ずっと気になっていたんですけど、今日の朝びくしてリー・ホアさんが玖穂先輩だって気が付いたんです？」

今時見かけない長細いタイプの缶に入ったオレンジジュースを飲んでいた先輩が此方に顔を向ける。

「あれ？…………そうね、普通に教えちゃつたらつまらないからヒントを上げる。」

と言つてから私の顔を暫く見て一言。

「優月、来週中に生理が来るでしょ。」

「…………何で知ってるんですか？」

誰にも教えた覚えはない。そもそもそつとつ事を教えるような相手なんて私にはいた事がない。

「知ってるってこつのは正しくないわね、アタシには分かるの。」

「どういう事だろ、知っているとか私から聞いたとかなら兎も角分かるところのは……もしかして女性の生理がわかるところ特技だろ？……何だか末期的な特技だけど例えそつだとしたら今日の朝玖韻先輩を見破った事のヒントにならない。」

「…………もしかして、何で先輩が私の生理が来週かつてわかる事が、だからそのわかる理由がヒントって事ですか？」

「優月賢い！」

撫でられた。

「ちゅちゅっと止めてくださいッ恥かしいじゃないですかッ！」

「良いじゅない、恥かしがることなんて無いわよ。ねえ？」

カウンターの向こうでキューを磨いていたメイド姿の従業員さんに太刀風先輩が同意を求める。

笑顔で頷いているが、少し苦笑混じりなのを私は見逃さない。

「それとも優月は撫でられるの嫌い？」

「…………いえ、決して嫌いと言つ訳じゃ……」

「じゃあ良いじゃない。」

撫で撫で撫で撫で撫で撫で撫で撫で撫で。

猛烈に撫でられる、嘘でも嫌いって言った方が良かつたかもしが

ない。

……決して悪い気はしないけど、素直に認めるのは拒否する。

「で、優月答えはわかつた？」

たつぱり五分は撫でられてから太刀風先輩が満足したのか何だかシヤツヤしながらそう聞いてくる。

「わかりません。」

「…………少しは考えた？」

「すいません、考えなくとも答えがわかりそうな時は考えない事にしているんです。」

「うーん他力本願。

「アタシとしてはその脳の温度が上がりそうな考え方はどうかと思うけど……まあ良いわじゃあ種明かしね。」

とネイルアートの施された指先で自分の鼻を指し示す。

「コレはちょっと自慢なんだけどアタシ物凄く鼻が利くの。」

「鼻ですか？」

「そう、今朝の玖韻先輩の変装は確かに見事だつたけど流石に自分の匂いまでは変えられないもの、香水で誤魔化していたけど、ほら大笑いしたでしょあの時にね、気が付いたのよ。」

「………… 玖韻先輩香水なんてしてましたか？」

「それも分からなかつたの？没薬ミルクに各種スパイス、後はジャスミンとかイランイラン辺りが感じ取れたからオピウムじやないかしら。」

「でも何で笑つた時に玖韻先輩だつて分かつたんですか？」

「そうね、優月嘘発見器は知つてゐる？」

「嘘発見器つてあの身体に電極みたいなのくつ付けて質問するとグラフが動いて嘘かどうかわかるアレですか？」

「せうそ、じやあ嘘発見器がどうやつて嘘かどうか見分けるのか分かる？」

「………… 知りません。」

「浅学ね。」

「ほつとこて下さー。」

「では、浅学な優月に太刀風凧那」と、なぎりんが説明して上げましょ「へ。」

と同じ女性として劣等感を抱きそうになる胸を張る。

それはともかくいい加減「なぎりん」つて今時ガキ小学校低学年だつて嫌がりそうな一人称がイタイと思つけど黙つておこつ。

「嘘発見器の一番始めは古代日本で行われていた（クガタチ）かしら、漢字で書いたら（盟神探湯）沸騰させたお湯の中に勾玉を落と

して罪人と思わしき人物に拾わせる。無事拾えたらそれは神様が認めたと言つ事で無罪。もし火傷をすれば有罪。まあコレは中世の魔女裁判に少し通じる物があるかもしれないわね、手足を縛つて水に落として浮び上がつたら魔女だから火刑。沈んで溺死したら人間だつたつてね。要は今と逆で疑わしきは罰しろつて考えだつたのよ。

では、科学的根拠の嘘発見器の歴史はといえば、まず1921年に遡る。当時のアメリカはフォーダム大学でウイリアム・マーズトン教授が嘘は血圧に影響すると言う理論を発表。これを読んだ力リフォルニア州警察のオーガスト・ウォルマー本部長は血圧測定器を利用した嘘発見器を造らせた所、自分で実験台になつて実験してみたら小さな動搖にも反応し嘘を見破る結果となつたワケ。関係無いけどオーガストって名前聞くとオーガスト・ダーレスの方を思い出さない?

それは兎も角、コレが一応嘘発見器第一号とされているハイドロフィモグラフ。当時結構話題になつてそれを見た犯罪者が偽証するだけ無駄だと悟つて白状したなんて話も残つてゐるぐらいだから。」

怒涛の勢いで太刀風先輩の口から嘘発見器の歴史が流れ出る。それにしてもオーガスト・ダーレスって誰だろ?

「その後改良されて、血圧の他に脈拍、呼吸速度、発汗量も同時に測定できるようにしたカーディオ・ニコモ・サイコグラムが使われる様になつたの。只、弱点もあつてね、長時間尋問すると血圧や脈拍を左右するアドレナリンが分泌されなくなつて反応を示さなくなつるから一回の使用時間は3分までとなつたのよ。個人的意見としては嘘発見器なんて使う時点で基本的人権なんて無視してゐるような気がするし、そもそも犯罪者に人権なんてないんだから自白剤でも考く問題でもやつた方が手つ取り早い気がするけどね。」

心なし乱暴な言葉で太刀風先輩が話を締め括る。

「…………何でそんな事に詳しいんですね？」

「何言つてゐる、一般常識よ。」

「何処の世界の一般ですか…………」

「あえて言つたら第3世界だけど、いいじゃない、そんな事どうでも。それで、結局嘘発見器の基本的概念は不随意の身体の反応を測定し、被験者の恐怖、ストレス、覚醒を判定、分析する物で今のモノは多重センサーシステムを使ってGSRを測定するの。」

「GSRって何ですか？」

「galvanic skin response 和訳すると電気性皮膚反射。理科の実験で習わなかつた？蛙の足の筋肉にメスで触れるとピクピク動いたりするの、アレの事よ。」

「…………本当に詳しいですね。」

「因みに江戸時代のお庭番も似たような詰問方法を探つたそつよ。」

「お庭番つて吉宗さんの所のアレですか？」

「…………（近所さんみたいな言い方ね、まあそつよ、そのお庭番。捕られた間者の全身の関節を外して、四肢に紐を結びそれがあげづつが紐を持つたら準備完了。後は質問すると不随意筋が反応してその反応具合で真偽を確かめたとか。」

「中々えげつないですね。」

「そつかしら、敵に情けを掛けるなんて百害あつて一利無しよ。見
チアンドテスティロイ
的必滅素晴らしい言葉ね。」

「Jの人真顔で何言つてんだろ。……

「話を戻すけど、JのGSRは被験者が何か反応を起^{ボリグラフ}せば如実に変化を示す。その反応から事の真偽を見るわけね。最後に嘘発見器の正式な名称は多現象同時記憶装置。試験に出すから。」

試験するんですか？！

「それにしても、本当に詳しいんですね。」

「だつて造つた事があるもの。」

……はい？

「先輩、そんな簡単に造れるものなんですか？」

「基本理念を理解して知識があつてお金と技術があれば以外と簡単よ、ほら、アタシ専攻が機械工学と心理学でしょ、レポートに必要で造つたのよ。」

随分軽く言つてるけど、もしかして太刀風先輩つて物凄い事をしているんじやないだろうか？こんな露出狂みたいな格好してるけど、人つて本当に外見で判断しちゃいけない。

「何だか今の説明を聞く限りだと、嘘発見器つていうのは自分でも意識する事や制御できぬような反応を感じとつて測定して嘘かど

うかを判断する機械って事なんですね？」

「そりそり、優月も中々理解力あるじゃない。」

また撫でてこよつとする先輩の手を避けながらふと思つた事を聞いてみる。

「それじゃあどんな人であろうと嘘発見器に掛かれば嘘は見破られるんですか？」

「…………確かに大抵の人はそうだろうけど、中にはいるのよ嘘発見器でも嘘が見破れない人が。」

「そんな人がいるんですか！？」

「というかそもそも嘘発見器なんて名前だけど、嘘を発見してる訳じゃないし。」

「…………はい？」

「嘘発見器ボリグラフはあくまで人の反応を調べるだけの機械だもの、緊張症の人に使用すれば結果だつて全然違うんだから、現にアメリカ辺りだと検査結果の信憑性が低いって裁判だと証拠扱いされない事の方が多いし。主流は多現象同時記憶装置から特定脳波検出機器にわりつつあるわ、コレは人が嘘をついた時に出る脳波を言葉通り検出する装置なんだけど…………まだ聞きたい？」

「いえ、もうおなか一杯です。」

「そうね、アタシもいい加減飽きたわ。まあ今回はコレだけ覚えて

おきなさい。嘘発見器と称される物で嘘は発見できないと。」

「含蓄に富んだお話でしたハイ。」

「それで、話は戻るけど、嘘発見器ボリグラフでも嘘を見破れない人間はいるのかだったわね。答えからすれば幾らでもいるわ。実例から見れば舌を強く噛んでその痛みに集中する事で誤魔化したとか。息を止めたりして心拍数を上げて誤魔化したとか。そもそも心拍や脈拍、発汗、呼吸は訓練しやすい自在に扱えるモノだし。」

「成程、諜報員スパイとか簡単にスルー出来そうですねえ」

「実際そうじやないかしら。だから私が作成したのは発汗とかそういった物を殆ど無視してGSR主体で造つてみたんだけど

「

先輩が苦笑を浮かべてジュースを呷る。

「一人だけいたのよ、どんな質問をしても一切フラット、針に動きが出ないって人が。」

ぐしゃりと太刀風先輩がスチール缶を縦に握り潰す。

何気に物凄い事をしながらとんでもない事を言つていたような気がするのは氣のせいだらうか？

「機械上の不備も考えて、数回点検した後に身体検査迄したのにフラット。計器は一切動きを見せなかつた。となると考えられる可能性は大きく分けて二つ。」

珍しく真面目な顔だ。コレで服装さえまともなら才女とか才媛なんて言葉が相応しい外見なのに。

「一つは自分の身体を完全にコントロール出切る。脈拍も呼吸も血圧も発汗も、だけど此処までは訓練しだいでどうとでもなる。問題はその先。不随意な物なのだから制御しようが無いのにして見せた。五感に感情。下手をすれば生体電流や脳内物質も自由に操っている事になる。」

何その人外。

「二つ目に魂の底から嘘吐きだと言つ事。」

「どう言ひ意味ですか？」

「自分の嘘を心の底から本当だと思い込めると言つ事。」

「つまりあからさまに他人から見ても嘘だけど、本人がその嘘を本当だと自分の身体や心にすら嘘をついて騙しているから反応が無いつて事ですか？」

太刀風先輩が頷く。

どちらにしろそんなの両方人間じゃない。

「だから優月も氣をつけなきゃ駄目よ、玖韻先輩には。」

「そう、俺には氣をつけるんだよゆづもなきも。」

肩をぽんと叩かれると同時に後ろからそう呼びかけられ私と太刀風先輩の時が止まる。

「く……玖韻先輩……何時からいらしゃったんですか？」

ぎりぎりと音が聞こえてきそつた動きで振り向き太刀風先輩がそ
う尋ねる。

「うん？ 基本理念さえ理解してれば辺りぐらいからかな。」

「——」と満面の微笑を浮かべている。が、その笑みが怖い。

「もう夕餉の時間だ、今日は——姉さんが得意料理ご馳走してくれ
るって言つてたから、そろそろいかないと——姉さんすねる。」

私物らしき絶望だつてもう少しは明るいだろうなんて思わせるほ
どに真つまつまつ黒な浴衣の裾を翻ひるがえし先にすたすた歩き出す。

「……じゃあ先輩、嘘発見器にひつかからかつた人つて。」

私が恐る恐る指差す真つ黒な背中を見ながら太刀風先輩が一つ頷
いていた。

結局なんで玖韻先輩が笑つた事で太刀風先輩が正体を見破つたの
かその理由を聞くのをすっかり忘れていた事を思い出したのはテー
ブルに着いてからだつた。

第一幕 忘我邸一田田？（後書き）

嘘発見器についてウイキペディアを参照させて頂きました。

第一幕 忘我邸一〇〇?

「へい、ミス優円こんな所で何してマスカ？」

2階の喫茶室で紅茶を楽しんでいた私に声を掛けてきたのはキース先輩だった。

「さつまレーハルさんカホテに楓さんのいれてくれる紅茶は美味しいって聞いたから早速」馳走になつていったんですね。キース先輩も如何ですか？」

「オウ、ではミーも頂きましょつ。」

キース先輩が着流しの裾を掴みながら歩いてくる。着替えたのか南無阿弥陀仏の文字はない代わりに「我ニ敵無シ」と書かれている。どちらにしろ余りいい趣味じゃないけれど、細長い体とカールがかつた金髪にミスマッチして妙に似合っている。

そういうばどうしてキース先輩はこうも和風趣味なのだろう、聞いた事も無いが始めて見た時から派手な着流し姿を通していいる。物凄く聞いてみたい気もするが、聞いたら聞いたで思いつきり後悔しそうな気もするのは何故だろう？

何だか葉隠とか武士道とかを延々と説かれそうな気がする。

「生憎準備中の為あまり種類がございませんが、何になさいますか？」

楓さんが耳に心地よい声でキース先輩に聞いている。

楓さんは耀耶麻三テルヤマサン姉妹の次女である。本来ならまだここ眩暈館

はオープンしていないワケであつて、昼間は様々な準備の為に大勢いた従業員の方々も夕食前には本館、忘我邸の方にある宿舎に戻ってしまっている。それでも最低限の人員は残しておかなければいけないと言う事で夕食の席で紹介されたのが耀耶麻三姉妹こと、長女ヤマモリ、次女耀耶麻楓、そして三女耀耶麻紅葉と秋に産まれたという理由から冗談でつけられたような名前の三姉妹だつた。私達が滞在している間はレニエルさんと耀耶麻三姉妹が世話をしてくれるという。

それにもしても耀耶麻さん。一卵性の三つ子と言うだけであつて。外見はそつくり。その上服装も同じなら声質も身長も仕草もそのタイミングさえも同じで見ていて複雑な気分になつた。一応胸に名札は着けているものの交換したら私には当たられる自身が無い。太刀風先輩の言では多少匂いに違いがあるといつけど、正直私には分からぬ。

「そう言えばキース先輩はどうして口々へ？」

自称楓さんからアールグレイを受け取り満足そうな顔で味わつているキース先輩に声を掛ける。

「実ハ、玖韻先輩に一杯ヤロウと誘われマシテ、1階へ行くのに口を通ろうとしたらミス優月がいたワケデース。」

そのまま優雅な仕草で紅茶を飲み干し立ちあがる。

「ソウ、もし良かつたらミス優月、ソレにミス楓も一緒にイカガデスカ？」

私は兎も角楓さんはキース先輩の突然の提案に少し戸惑つたような顔を浮かべる。

「……そうですね、今日は皆様の他にお客様はいらっしゃいませんし、片づけをしてから時間があるようでしたら覗かせていただいても構いませんか？」

「勿論、テース、ガレキもサマーの後の祭りイイマスカラ。」

キース先輩の言葉に楓さんが笑顔で首を傾げる。

それを私はひやひやとした気分で見ている。何しろ派手に間違っている上に何だか混ざっているが、キース先輩本当は枯れ木も山の賑わいつて言いたいんだから無礼千万な人だ。もっともキース先輩の場合諺の意味をちゃんと理解しているかどうかという問題もあるんだけど。

「ミス優月はドーシマスカ？」

私の非難が籠つた視線なんて気にもせず明るい調子でキース先輩が聞いてくる。

「じゃあ私も」一緒にします。」

お酒にはあまり強くない。かといって嫌いというわけでもなく、寧ろ好きな方だ。

「オウ、相変わらず下手の横好きテース。」

珍しくキース先輩が正しい諺を言えた。でもその使い方は違う。楓さんが私とキース先輩のカップを片付ける姿を後ろに見ながら喫茶室を後にして第一廊下を越えホールから下に向かう。

1階のバーに入ると私とキース先輩以外のメンバーが揃っている。

緩く弧を描くカウンター一番右奥にレニエルさんが背の高いスツールにちょこんと腰掛けている。呑んでいるのは青い色をしたカクテル。頬は少し赤く染まり目は潤み、その幼い外見とは余りにアンバランスな要素が見事なまでに可愛らしく太刀風先輩や霞桜先輩でもないけど何だか攫つてそのまま大きめのドルハウスか何かで飼育と言えば語弊があるかもしねんだけど、他に相応しい表現もないので飼いたくなりそうだ。とても年上の女性に思つて良いような感情とは個人的に言えないけど、時に感情は年の差なんて越える物だし。それに実際六歳しか変わらない。

その隣に玖韻先輩。真つつつつ黒な浴衣はさつきのまま、黒髪は緩く三つ編みにして肩から胸元へ垂らしている。こちらも白い頬が薄つすらと紅く目は潤み近寄り難いほどに綺麗だ。妖艶とか艶麗なんて艶の文字が入る言葉が似合いすぎる。こういう人が知り合いだと自分の価値が上がつたような気がして少し良い気分だ。もつともその価値は私を通してそういう人にお近づきになりたいという事から産まれるのであって、私には何にも正規の意味で附加価値が産まれているわけじゃがないのが悲しい所。

呑んでいるのはどうも日本酒らしく手には艶やかな漆塗りの杯を持つている。カウンターの上には大振りな白鳥徳利。あの様子からして結構聞し召してゐるんだろう。

一人離れたボックス席に座っているのは霞桜先輩。此方も着替えていて白のスラックスに深紅のシルクシャツ。原色系の色が好きな人だ。淡い色は霸気が無く、着ると侵食されそうで嫌なそうな。シヤワーでも浴びたのか髪も今は降りている。意外な事にその外見からは想像もつかないが霞桜先輩はお酒に弱い。呑めない種類も多く唯一嗜むのがブランデーだからある意味徹底している。呑める量も多くないので手に持つたブランデーグラスには指一本分程褐色の液体が揺れている。またお酒は静かに一人で飲むものと妙な拘りを持つていて今日もそれを守つてはいる。良い意味でか悪い意味でかは置いておくとして絵になつてゐるのは間違ひ無い。

カウンターの真中辺りに鴛淵先輩。着替えはしているもののその柄は筆舌しがたい。ズボンは蛇皮、或いは蛇皮柄。シャツに至つては極彩色の金剛界曼荼羅こんごうがいまんだらときた。もしかしたら胎藏界曼荼羅たいぞうがいまんだらかもしれないけどそこまでは分からぬ。一体何処で服を買つてくるのか今度聞いてみよう。

でも……誘われたら困るなあ。

呑んでいるのはビール。一いつして見ている間にもビールピツチヤーから黄金色の液体が見る見る鴛淵先輩の口に消えてゆきサーバーから慣れた手つきで泡と液体の見事な対比をピツチヤーに満たしては次々と飲み干していく。

さらにその隣でレニエルさんに油断の無い視線を送りながらも鴛淵先輩と呑み比べに興じる太刀風先輩の姿。鴛淵先輩が量を飲むのに反して太刀風先輩はショットグラスをカパカパと空けていく。多分中身はアブサンとかスピリタスとかレモンハートとか矢鱈度数の高いヤツなのは間違いない。火でも付けたらさぞかし良く燃える事だろう。火葬場要らずだ。

……いえ、そんな事企んでいませんよ。

「おやキース、遅かつたやん。」

バーに入ってきた私達に気がついたのか色っぽい顔のまま玖韻先輩が話しかけてくる。

口調が少し関西風なのはか霞桜先輩とつるんでいる内に感染つてしまつたのがアルコールが入ると出てくるらしい。

中性的で辛うじて男性に聞こえる声でどうにか男女の識別が可能な感じだ。

「ええ、チョット喫茶室に寄つてキマシタ。」

「フフ、楓さん可愛かつたからやる、どうするレニエルさん、従業員

「手出せうとしてるのが一人いるけど？」

「も、玖韻ちゃん、私はそんな事一々言う程狭量じゃないわよ。子供じゃ無いんだから本人達がそれで良ければ良いじゃない。」

「やうなん？ それなら桜さんは、妹サンが説かされそうやけど？」

カウンターの奥でシェイカーを華麗に振っていた桜さんが微笑む。 態々着替えたのかメイド服姿から白のタイトなドレスシャツに変っている。首にはワイン色の蝶ネクタイ。

「私も支配人と同意です。それに妹とは言え個人の恋愛に首を突っ込むなんて野暮のする事です。」

その答えに玖韻先輩が満足したような笑みを浮かべる。

「うん、良い答えや、野暮はいけない。風流に行かないと。」

「その通りテース、ミーが尊敬する方もそう言つてマース。」

一つ席を空けスツールに私とキース先輩が腰掛ける。

「」注文は何になさいますか？

桜さんが楓さんと全く同じ声で聞いてくる。そして同じ仕草でメニューを渡してくれる。

メニューを暫し模索した結果、私がモスコミユールかミモザのどちらを頼もうかと考えているとパタパタと軽い足音をさせて耀耶麻三姉妹の誰かが入ってくる。ネームプレートを見ると三女の紅葉さんだった。

「支配人、ちょっと直しいですか？」

紅葉さんがレーハルさんに何やら耳打ちしている。

「あら……やつ、通してねしあげて。」

レーハルさんの葉に紅葉さんが領券バーから出でていく。

「姉さんどうかしたん？」

「ええむけっとしたお姉さん、ただし招かざるお姉さんだけじ。」

玖鶴先輩の間に可憐りしひレーハルさんはいつも答えるのが聞こえてきた。

開幕 比良坂湊の独白（前書き）

二人目の主人公？が舞台に上がります。

開幕 比良坂湊の独白

世の中は偶然で成り立っている。

俺はそう思つて過ぎヒツゼンしている。

この世の全ては必然である。全ての出来事は起るべくして起るのだ。なんて事を聞いた事もあるが、俺に限らず大抵の人間に自分が偶然生きているのか、それとも必然の上に生きているのか、もつと言つてしまえば自分が本当にこの世界に存在しているかどうかですら分からぬワケで……何だか話が反れてしまつた気がする。そう俺が言いたい事はこの世が偶然の産物だと言う事だ。例えば世界が滅亡するとすれば、そんなものの運命でも何でも無く偶々偶然の上滅ぶんだろう。

天文学的に一の数字だろうが確立なんて所詮日安。起きてしまえば現実はそれだけしかない。

実に不愉快だが。

だから俺がアイツと出会つた事だつて偶然でしかない。類は友を呼ぶなんて言葉は大嫌いだ。そんな表現を信じてしまつたら俺はあんな連中の類であり友という事になつてしまつ。それは避けたい。とはいえるアイツと出会つてしまつた事は事実であつてもう面倒臭くなつてきた。

要点だけを述べよう。

俺はアイツと出会つた。

それが偶然か必然なのは知らないけど。それだけだ。

第一幕 邂逅？ side比良坂（前書き）

今回の諸注意。
軽いグロ描写があります。
主人公が変態です。
以上の二点にご注意を。

俺の朝は早い。

尤もこの早いは世間一般から見ればという話であつて俺からすれば普通なのがアイツに言わせると「棺桶に片足突っ込んだ年寄りより早い」だそうで……つまりは早いのだ。

朝は日が昇る頃に起きている。俺の部屋には時計もテレビも無いから特に毎朝時間を確認した事も無いが四時五時といった所だろう。そしてベッド代わりのソファーに寝転がつたままソレを手にとつて暫し考えを巡らす。

手にとるソレは日によつて違つ事もあれば一週間も一週間も変らず同じ事もある。

ソレは例えば切れ味だけは抜群の剃刀だつたり、怖い鋭さのナイフだつたり、はたまたちょっと非合法な手段で手に入れた速効性猛毒、青酸だつたり砒素だつたり、さらには完全に非合法な手段で手に入れた銃弾の詰まつた拳銃だつたり。つまりはそんなモノだ。どれも上手く使えば簡単に入が殺せて、使い方が下手でも自分は殺せる。

その日は拳銃だつた。装填数一発のデリンジャーを右手に握り俺は日課の考え方を始める。その内容は今日どれだけ楽しい事があるか。例えは出かけて何か出会いがあるかもしれない。何か事件に巻き込まれるかもしれない。

いつもやつて毎日出来るだけ楽しい事を考える。そつして一日を生きる気力が浮いたら右手のソレは鍵の付いた箱に納めてソファーから起きる。

もし気力が浮かばなかつたらそのまま引金を引く。今まで剃刀を持つていた時に一回どう考へても生きる気力が浮ばず首筋を切り裂いたものの浅かつたのか場所がずれたのか血は出るもの一向に死

ぬ事も無くソファーを汚しただけで、終には偶々尋ねてきた知り合に発見され病院に搬送されてしまった。

だから今日は拳銃を選んだ事に運が良いと思つたものの、考へている内に集めている本の最新刊の発売日だった事を思い出して拳銃をしまい込み身体を起こした。

夜が明けきるのをモーニング一冊手に見て過ごし、本屋の開店時間を持って出かける。そしてお目当ての本を手に取り立ち読みを始め、途中近所の喫茶店で軽食を取り、再び立ち読みに戻り、気が付けば午後の八時。約9時間程立ち読みをしていた事になるがコレも何時もの事なので気にせず会計を済ませる。

アイツから言わせると5時間以上立ち読みするようなのも一種の変態だと言われた。余計なお世話だ。本屋の楽しみは立ち読み以外に何があるというのだろう？後は店員をか如何にからかう事ぐらいだ。

少々小腹もすいたので行き付けの居酒屋へ行くと臨時休業の札が下がっている。

今思えばココが分岐点だった。選択肢は無限とはいき今までの数え切れない程にはあつたであろう。その中で俺の頭に浮んだのは二つ。一つは大人しく帰る。もう一つは他の店に寄る。

俺は後者を選び普段は入らない裏路地に入ると阿弥陀籬あみだくじのように行き当たるたび道を変え、奥へと進み、そしてその店はあつた。こじんまりとした小さな店。イギリスにでもありそうなパブ風の外觀をした店だった。

こんな店があつたのかと少し驚きながら店に入るとアイツはいた。その時の俺の印象を言えば妙な格好のヤツだと思つただけだ。

客はその怪しいヤツ以外誰もおらず手前のカウンター席に座ると氣難しい顔をした爺さんが「ご注文は」と短く聞いてくるのでメニューを捲り適当に注文した所で俺は何となく一番奥の席に座るヤツを観察していた。

全身黒尽くめ。髪は真っ白。そんな井出達。

銅製のビアジョッキに注がれたビールを飲みながら眺めていると俺の視線に気が付いたのかソイツは俺の方に顔を向けるとニコリと笑つた。

……正直俺はその顔に見惚れていた。白を通り越して青白い肌、青紫の唇そして透き通つた紅い瞳。ソイツは立ち上がるとゆつくりと俺に近づき、そして話しかけてきた。

「問題デス。」

透き通つた声が脳に響く。ただ「デス」の部分がどう考えてもDEATHとしか変換できない発音だった。

「ある所に山岸クンと九段クンがいました。所がまたある日如何なる事情からか山岸クンが死んでしまいました、すると九段クンも死んでしまいました。何故でしょ?」

何故も何もないと思った。死んだらそれまでハイおしまいよ。死んでしまえば元人、肉の塊に過ぎない。一日どころか数時間も放つておけば腐臭を放つ肉の塊だ。だから死んでからあれこれ言うなんて愚の極みだと、何時もなら思うのだが何故かこの日はそもそも思えなかつた。

「早く答えなよ、ボクには時間が無いんだ。」

「二コ二コと笑いながらこんな店にも関わらず、猪口を片手にソイツは急かしてくる。

俺は急かされているにも関わらずソイツを間近で改めて観察していた。

靴は踵の高い先の尖つた黒い革靴、細かなステッチで模様が入つ

ている。レザーパンツに大振りなゴシック十字を模したバックルが迫力のあるベルト。胸の大きく開いた、十二月という冬の最中だと言つのに胸元の大きく開いたレザーラしき黒いシャツ。背はあっても華奢としか形容できない身体。ただし瘦せていると言つよりは締まつてある。肌は白を通り越して青白い。黄色人種の持つ肌色を薄めた白でもなく、白色人種の持つピンクがかつた白でもなく、どこまでも虚無的なほどに真白な肌。

唇は董色ともとれる薄い青紫。

だが、印象的だったのは髪とその目の中だった。

髪の色は白銀。どこまでも醒めた冷たい色の銀色。

目の中は深紅。落日を想像させるような強い深紅。なのにどこか醒めていて、その色を表す言葉を考えると言わわれれば、そつ、凍りついた炎のような色。

冬季野外戦闘用迷彩服でも着られて目を閉じ雪原にでも紛れ込まれればまず発見は無理だ。

「ほら、早く答えなつて。」

再び急かす声に俺は口を開く。別に答えを用意していたワケでもなくそれとなく考えた事を口に出した。すると。

「……うん……なる程その答えも在りだね、キミ気に入ったよ。縁があつたらまた逢おうね。」

そう言つてソイツは手早く勘定を済ませると長いコートを肩に掛け店から出て行く。

俺はその後姿を呆然と見送りながらすっかり温くなつたビールを呷つた。

結局その日はソイツの事が気になつてしまつかり酔う事も出来ず中途半端な気分でそのパブを後にした。料金は想像以上に安かつたのを

覚えている。

その帰り道の事だった。知らぬ間に長居をしていたらしく店を出て携帯の時計を見てみると深夜1時を過ぎている。何だか釈然としないまま帰途を急いでいる時だった。近道の為通りぬけようと入った公園にソレはあった。

こんな市民公園には勿体無いほどがつしりとした立派な木製のベンチの上、青白い街灯に照らされソレはそこに座っていた。

年齢は二十歳前後に見えるソレは一糸纏わぬ姿でそこにいた。遠目に見える肌には染み一つ無く痩せ型な体形にも関わらずそれなりに胸はあり好みの体つきだった。問題点と言えば首から上がその膝の上に置かれていた事だろうか。

近寄つて首の切れ口を街灯の明かりを頼りに見て見れば素人目に見ても綺麗な物。組織が潰れたり骨が欠けたりしていない。背骨に絡み付く神経が印象的だった。

膝の上の顔も髪を搔き揚げて覗き込んでみれば安らかな顔をしている。まるで寝ているかのような顔とはこんな顔の事なのだろう。できるならこのまま保存しておきたい程好みな顔をしていた。まだ切られたばかりらしく身体は温かく首からも血は収まる事無くどくどくと溢れ出ている。

俺はどうしようか暫し迷つたものの白い肌が紅く濡れてゆくのを見ている内にどうにも好奇心が湧き首の切断面に舌を這わせ血を舐め取つっていた。何故そんな事をしたのか未だに分からない。

ただその時はそうしたかったのだ。

生暖かい感触、骨に、血管に舌が触れぴくぴくと感触が伝わってくる。塩辛い生臭さと鉄臭い味、俗に鉄の味と言われる血の味だけじゃなく、甘いようにも感じる脂の味、非従順的な酸味と苦味のする胃酸、経験した事のない體液、すべらかだつたりねつとりしていつり刺激を感じたり、様々な感触と味が舌に触れていた。だがそれ以上にその時俺の舌はどうしきつもなく陰鬱で背徳的な甘味を感じていた。

「マフラーが血で汚れないようなんてしようもない心配をしながら舌ですべすべした背骨の周りを抉ると様々な太さの血管や神経が絡み付き、それを舌で引っ張り出し口の中で弄び時折歯でぶつりと噛み千切る。

溢れてくる膿液が顔まで飛び、食道から「ボボボボと久方ぶりに水を流す配水管のような音を立てて刺激臭まじりの黄味がかつた液体が登り俺の舌を刺す。

肉は皮膚との間から滲み出る甘い脂と無味のさうさうとした液体、それにはねつとりとした血で覆われ舐めていて楽しかった。

舌を這わせたまま血で塗れた首筋を下り胸元を舐めている時にその声は聞こえてきた。

「おや、予想外の獲物がかかつたね。」

驚く氣も起きず、顔の体液を拭うのも面倒でそのまま振り向くとアイツは立っていた。

「キミは血液嗜好でもあるの？それとも吸血鬼だなんて言つんじゃないよね？」

小罵廻にしたような笑みを浮かべ俺に問い合わせてくる。

「…………少なくとも俺は自分の事を吸血鬼なんて自覚した事もないし血液に殊更執着があるわけでもない、だから今日は…………たまたまそういう気分なんだ。」

今更拭つた所で顔の血や脂が取れるわけでもないのでそのまま不敵に、態々音をたてて舌なめずりをして笑つてやる。と笑つた所で俺はソイツが手に持つている物に気が付いた。

「…………で、どうする？俺もこいつなるのか？」

親指で背後の元人を指す。

「勘違いしないで欲しいな、ボクはその人を殺してなんていないよ。ただ服を脱がしてベンチに座らせて首を刎ねただけ。」

右手に持つた鞘に入つたままの日本刀を少し持ち上げて見せる。

「昔から言つでしょ、人を切ると格段に腕が上がるつてね。」

ショリイインと黒蝶塗りの鞘から日本刀を引き抜く。血や脂による波紋の乱れは無く青白い明かりに照らされ浮かび上る三日月型の光にゾクゾクと少し興奮した。

第一幕 邂逅？

街灯に照らされた日本刀が青白く光る。

切つ先は揺れる事無く俺の方に向き、その赤い瞳から表情は読み取れない。ただ、顔だけが笑みを浮かべている。

「それでオマエはここに死体があつたから切つてみたつて事か？」

「まあね……ついでに言えば切るのは何処でも良かつたんだ。でもできるだけ血の出る所を切ればその匂いに惹かれて何か来るんじやないかと思つていたらキミが来たんだよ。」

そんな事をいわれたらまるで俺は誘蛾灯に寄つて来た蛾か何かのようだ。

そして誘蛾灯に誘われた蛾の行く先は決まつてているような物だ。天国か地獄かはしらないが、そもそも蛾に天国とか地獄とかの概念があるのかどうかすら知らないのでもつと具体的に言うなら科学的に殺虫剤か、陰険に毒瓶か、はたまた思いきり良く丸めた新聞紙か。

方法は違えど結末は同じ。

「一つ聞くがこの死体は？」

「知らない。この人を殺したのが誰かとか殺害方法とか殺害理由とかは知つてるけどこの人が誰だったのかは知らない。」

俺が聞きたかったのはそう言つ事じやない気もするが、多分この答えで良いんだろう。

「ボクも一つ、いや二つ聞いて良いかな?」

「聞くだけならな。」

「いいねそういう受け答え、ボク素直じゃない人は嫌いじゃないよ、好きでもないけどね。」

「『』と嬉しそうにソソイツが笑う。

「じゃあまずキリの名前は?」

「名前? 戸籍上のだつたら一応比良坂湊ヒラサカミナカって名前だ。」

「忌み名は?」

「忌み名? 在るかもしないが俺は知らない。それにそんなモノいまだに在るのは皇族と一部の華族ぐらいだる。」

ふつんとソソイツは額き俺の名前をぶつぶつと何度も口の中で繰り返しながら控てている手でペンを取り出すと口に呉え、器用に手のひらに何やら書き付けると、ふつとペンを吹き棄てる。

「……うん、比良坂湊ね、これで多分キリの名前は忘れないよ。」

街灯の下、そいつの左手には俺の名前が辛うじてカタカナと認識できる字で踊っていた。

「別に覚えて貰う必要は無い」と思つたがな。」

「またまた、遠慮しなくて良いんだよ。」

「……どうせやり難い。」

「それにね、キミがどう思おうとボクが勝手に憶えておきたいんだ。理由なんか聞いちやあ駄目だよ。それは余りにも野暮だからね。」

「言い直そう。滅茶苦茶やり難い。」

「聞きたい事の一一つめ。美味しかった?」

「何がだ?」

すつとソイツが刀で俺の背後を指す。そこにあるのは当然先ほどまでの勢いはなくなつたものの、まだ首から血とかを流す死体。

「…………俺は甘いと思つたよ…………」

そこまで言つて少々悪戯心が浮ぶ。

「気になるんなら味見したりどうだ?」

困つた顔でも浮べるか、そんな俺の口論見はあっさりと覆された。

「それもそうだね。」

言つたかと思うと手馴れた仕草で納刀し、ソイツはすたすと死体の方に近寄り躊躇や嫌悪の欠片も見せず赤い舌を出すと血が溢れる切断面を、食道の部分を裂け頸動脈辺りを大きく舐め上げた。上質のワインを鑑定するソムリエールでもないだろうにソイツは

口の中で暫し血を噛みじつくりと味わつてから吐下し青い歯を舐めてからいつ呟つた。

「なる程、悪くはないよ。」

ソイツの口元から一筋飲み込み損ねた唾液混じりの血が流れた。白い顔に赤い血が数滴飛び散つっていた。

それを見た時。

前々から落ち氣味だつた俺は完全にあがらう術も無く、いや正直に言えあがらう術はあつたかもしれない。だが、俺はその術に気付こうともせず。

墮ちた。

「そう言えばまだ言つてなかつたねえ、ボクはね夢幻夜哀ムゲンノクアつて言つんだ。夢幻に夜の哀しみつて書くんだ、憶えてくれなくとも憶えてくれてもどっちでも良いよ。ボクは人が覚えようとする事まで一々口を出すほど傲慢なつもりは無いし、でも出切れば君には覚えておいてもらいたいかな。」

そう長々と物々しい名前を名乗つた後氣に入つたのかもう一度切斷面に口を近づけ今度は舐めるような真似をせず直接動脈の辺りに口を付けて音を立て鮮血を呑み下し。

「やつぱり悪くない。」

ポケットから出したレースの白いハンカチで夜哀が優雅に口を拭き、そして俺を見据える。

「ねえ湊？」

「いきなり呼び捨てか、図々しいな。」

「湊つて良い度胸してるよ、普通この状況だつたら逃げるか叫ぶか警察呼ぶか持ち帰るか。ボクは正直その四つのどれかじやないかと思つてたのに湊つたら見事にボクの想像を裏切つてくれたね。」

持ち帰りをするかどうかは微妙な線だ。死体愛好の趣味でもあれ
ば話は別だが。

て も

真っ赤に染まつて中々凄絶で良い感じだ。
なる程、持ち帰られてもおかしくない。

「良かつたじやないか、自分の予想とか想像が裏切られるつていうのは人生において数少ない楽しみの一つだろ。」

俺の言葉に夜哀の変化は劇的だつた。

夜哀の哄笑が公園に響く。

人が来なしが少し不安だ

「所でコレから湊どうするの？」

哄笑とも狂笑とも言えるものを一頻り上げた夜哀がそつ尋ねてくる。

「そうだな……」

辺りを見まわす迄もなく田に入るのは首切られ死体と寒風にはためくロングコートが格好良い日本刀を下げた夜哀の姿。チエーンソーを構えたレザーフェイスとまでは言わないが、お世辞にも平和的とは言えない格好とアイテム。

「とりあえず、オマエみたいなのを野放しにしておく訳にはいかないだろ?」

「と言つ事は、警察にでも行くつもり?」

「今それを考へているんだよ。」

ふーんと夜哀が頷きながら日本刀を鞘から引き抜く。

「何で刀を抜く?」

「うん、^{イス}国家権力なんて呼ばれた所で困らないけどボク面倒臭いのキライだし、それに入れを切るのって結構体力使うんだよ。」

さらりと恐ろしい事を言つてくれる。

「…………いいじゃないか、適度な運動は身体に良いってよく言つだろ?」

「アハハ、人斬りダイエットって?、でもボクには必要ないや今のプロポーションで十分満足してるよ。」

なる程。

引き締まつた体形を誇示するような夜哀のポーズに思わず俺は頷いていた。

「でも……キミ一人切るぐらいなら確かに程よい運動かもね……」

夜哀の目に剣呑な光が宿る。

まあコイツが出てきた時からそんな予感はしていた。

「そう……だね……湊はこの公園に来るべきじゃなかつたかもしない。」

そんな事はこの状況を鑑みれば言われなくたつて分かる。だが、来てしまつたものはしようがない。偶然そうなつてしまつたのだ。

「残念だなあ……せつかく湊とは仲良くなれそつだつたのに。」

残念だとか言つ割には満面の笑顔だ。

目から光が消えてはいるが。

抜き身の刀を提げた夜哀が近寄つてくる。

ふと思う。

どこで狂つたのだろう?

あのパブで夜哀に合つてしまつた事か?

行き付けの居酒屋が休みだつた事か?

本屋に長々と居座り続けた事か?

それとも

それとも今朝俺が死ななかつた事か?

一瞬視界の端に銀色の三日月が閃く。

熱かつた。

痛みより先に熱さが来ていた。

夜哀の刀は俺の肩を刺し貫き、それを目で確認して漸く痛みが訪れていた。

「……痛いな。」

夜哀が眉を顰め俺を妙な顔で見る。

間近に迫った顔に思わず息を飲み一瞬俺は痛みも忘れる。

「……それだけ?」

邪氣の欠片も無い顔。

純粋に不思議がついている顔。

「それだけって何が?」

「ボクはね、今から湊を殺すんだよ。それもね手足の腱を切つて身動きができないようにして、喉を裂いて声が出せないようにして全身の間接を丁寧に外して、骨を折れる限り折つて身体を刻める限り刻んで、キミが百篇殺してくれつて哀願する姿が見たいって言つてるんだよ?」

「何だ、お前サドか?…どうでもいいな、やるなら好きにこじろよ、抵抗する気なんて無いよ。」

夜哀の右手を掴み、俺の方に引き寄せる。

同時に肩を貫いた剣先はずぶずぶと沈み、痛みと熱さの中、固く冷たい刃物が肉を切り裂き、骨を擦りながら進む感触が伝わってくる。背筋ががくがくと振るえ吐きそうな程に気持ち良い。

悪くは無い。

痛みはこの世に存在している事をわずかなりとも伝えてくれる数

少ない手段の一つだ。

それにキツイ体験つていうのは結果がどうあれそれなりに面白い。そう、面白い事が重要だ。

面白くないモノ何て存在する価値すらない。だが、夜哀は自分で言つたような解体作業を俺に行わなかつた。代わりに一言。

「…………キミこれから死ぬより酷い目に呑わされて、その上でボクに殺されるんだよ、何か間違つていい？」

殺す事は決定事項か。

夜哀の質問に俺の頬が緩む。

「何も間違つていらないだろ、お前は俺を殺す、俺はお前に殺される。それだけだ。もつとも俺はともかくお前には責任があるぜ。」

「責任？ボクになんの責任があるの？」

「さつき言つたな、俺に百篇殺してくれつて哀願する姿が見たいって。そう言つた以上俺に百篇以上殺してくれつて哀願させて見ろよ。俺はソレまで俺の体が原型を留めていない方に賭けるがな。」

暫し夜哀が呆然とした顔を浮かべていた。がやがてその表情は笑みに変わり、瞳に光が戻ると嬉しそうに夜哀が一気に刀を引き抜く。痛みもあるが体内を異物が一気に動く感触が気持ち良いと同時に気持ち悪く恍惚と一緒に吐き気が襲つてくる。

「湊！…キミ最高だよ…」

服が血で汚れるのも構わず夜哀が俺を抱きしめていた。

「殺さないのか？」

「うんー・キミみたいなのを壊しちゃつたら勿体無いもの、仲良くしようよ。」

人を殺しかけておいて仲良くしようも何もないと思わなくも無いが、俺はあんまりそういう事を気にしない性質だ。

俺をどんな目に合わせようが、俺の基本スタンスの一つ「来る者は拒まず、去る者は追わず」は変らない。

基本的に。

「ああ、構わないが出切れれば医者につれてってくれないか？腕が上がらないんだ。」

その後夜哀は公園の茂みから持つてきたポリタンクの中身を首切り死体に振りかけマッチを放り、燃え上がるのを確認した後そこに鞄と一緒に量産品だという日本刀を投げ込んで俺と一緒に公園を後にした。

こうして俺と夜哀は出会うべくしてというかなんと言つか、出会つた。そして色々あつた。

夜哀と出会つた次の日友人が殺された。

一月にはさらにもう一人大事な友人が。

五月には俺の所属していたサークルのメンバーが数人殺された。

その一週間後には殺人の容疑で逮捕された（勿論誤認逮捕だ。）

何だかこう並べて見ると夜哀は俺に不幸を運んできた様に見えるが実際の所は逆だ。夜哀は俺に刺激とその日を過ごす楽しみを運んできてくれたと言つて過言ではない。つまりは感謝しているのだ。

そして話は俺と夜哀が知り合つて半年、お互いの住居を行つたり

来たりする傍目に見たら付き合っているような、そう友達と呼べる
であろう生温い関係にも慣れきった頃の事になる。

その日、七月も始めの日曜日、俺は溜まりに溜まつたレポートに
ウンザリしながら取り組んでいる時から始まる。

第一幕 出発？

「…………面倒臭い…………」

意識もせざそんな呴きが俺の口から漏れていた。

その日、俺は朝から国際関係論と西洋史さらに政治学のレポートに追われていた。

「…………ぐわー」

虚空に向かつて吼えて見たつて終わらない。

何とか政治学と国際関係論のレポートは終わらせたものの、西洋史のレポートを前にしてそうでなくともあまり多くはない俺の集中力はついに途切れようとしていた。

その上良く考えれば「歴史的見解による国際関係間にに関する政治について」なんて題名で同じモノを三部仕上げれば終わつたという事実がまた俺の集中力の減退に拍車をかけてくれる。それでもやらないと単位が貰えない。

その哀しい事実にペンを掴み惰性だけで再びレポートに取り組もうかと言つ時に何やら莊厳な感じのする曲が複雑な電子音で奏でられた。携帯をとり着信を見なくとも誰からか分かる。この曲が好きだと言つて夜哀が勝手に登録した曲で確かルクス・エテルナと言っていた。日本語に訳せば永遠の光。似合わないつたらありやしない。

「もしもし？」

「…………」

無言だ。

ディスプレイを見てみる、間違いなく夜^{ヨア}哀からの電話。

「どうした？用が無いなら切るだ？」

少し強い調子で聞くとやつと返事は帰つてきたが、声に張りが無い。

「…………湊、お願い直ぐ来て……」

それだけ今にも死にそうな声で言つて切れる。

殺しても死ななそうな、といつか死という概念があるのかどうかすら怪しい夜哀だが、こんな声を出されたら友人として不安になる。携帯を持ったままチラリとレポートに目を向ける。

今の時間は午後五時。夜哀の所に出かけたとして あと三時間頑張ればレポートは終わるだろう。

そう判断して鞄にレポート用紙と資料、筆記用具を納め慌てて俺は夜哀の部屋へと向かつた。これは決して逃避じゃないと自分に言い聞かせながら。

夜哀の住居は俺の住む学生専用マンションから自転車で十分ほどのある、俺が住んでいる所より遙に見栄えも中身も良い新築マンションの一室に住んでいる。

ただし自転車は元より移動手段は己の足しかないから一十分はかかる。

昔は自転車もあつたがサドルだけが一回盗まれたので破棄した。サドルを盗んだヤツはきっと俺の熱狂的なファンなのだろうと思う事にしている。悪戯^{イタズラ}やイヤガラセと考えるよりは其方の方^{そちら}の方がいくらか面白い。

「夜哀、大丈夫か？」

インターほんの音が気にくわないと外してしまった為スチールのドアをがんがんとノックする。返答はない。ノブを捻つてみるとドアは開いている。

「夜哀、入るぞ？」

ドアを開けながら奥に声を掛けるがやつぱり返答はない。眩しい明かりを極端に嫌う夜哀の暮す部屋。暗いのは珍しい事じやない。寧ろ普通だが今日は何時も点いているオレンジ色の間接照明も全て消えている事に違和感を抱き、慌てて夜哀の部屋に入つた俺が見たのは惨憺さんたんとした有様だった。

埃アレルギーとやらで少々潔癖症の気がある夜哀にしては信じられない程に部屋の中は長方形の物体で散らかり大型の薄型テレビは砂嵐を映している。そしてその部屋の主、夜哀は懶々フローリングの上に敷いた畳の上に倒れ伏せていた。銀髪が放射状に広がり蜘蛛の巣に掛かっている様にも見える。

「どうしたッ！大丈夫か？」

慌てて抱き起こすと顔に畠の痕をつけた夜哀が安心したような笑みを浮かべ一言ぽつりと呟く。

「…………お腹…………すいた…………」

何も言わずスリッパで夜哀の頭を一つ叩いた俺を責める事は誰も出来まい。

話を聞けばどうと言つこともない。偶々入つてみた某大型DVDレンタル店で青い猫型ロボットの映画が急に見たくなり全種類借りてきて文字通り寝食忘れて見ていたという事を俺がマンション前の自販機で買って来た100%のグレープフルーツジュースを飲みな

がら話した。

何と言つか、罵迦だ。

「コレ苦いね。」

「飲み終つてから文句を言つな。」

夜哀が「ゴミ箱に向かつて空になつた紙パックを放る。紙パックは綺麗な曲線を描き俺の隣に落ち、俺はそれを拾い改めてゴミ箱に投げ捨てる。

「で、俺を呼んだ訳は？」

「うん、『飯作つて。』

あつけらかんと言つてへる夜哀に腹も立つのも通り越し呆れてくる。

「あのな、俺締め切りの近いレポートがあるんだよ。悪いがゆつくりと飯作つてる時間は無いんだ。出前でもとれよ。」

「嫌だ」

「…………何で？」

「不味いから。」

差し出しつづくる出前用のお品書きの数々を見てウンザリしてしまふ。どの店も俺が実際一度頼み、後悔した店名。例えば自称中華の店、「麒麟亭」。^{きりんてい}

ヌーベルシノワを標榜する芸風にどんなものかと口替わりで出前をとつたらブタの内臓と頭に牛レバーが主体となつた死ぬほど血腥い上に見た目がスプラッタかつ獵奇的な絶句モノの中華丼が届いた。

例えば蕎麦割烹と銘打つ「杏庵」。

「100% 粉使用」何故かお品書きの蕎麦粉の部分が消えている事に興味を持ち盛り蕎麦を頼むと届いたのは餡飪だった。文句を言つと小麦粉100%との蕎麦だと逆ギレされた。どうも蕎麦粉を使つていなくて蕎麦じゃないと言つ事にこの店は気が付いていない。

他の店も似たようなものだ。

石膏を固めたようなピザが名物のスペイン料理店「かんぱねるら」もう平仮名の辺りが胡散臭い。それ以前にピザはイタリア料理じゃなかつたか？

因みにカンパネラはイタリアの哲学者だ。

……どうでもいいかそんな事。

生ゴムを焼いたようなお好み焼きが届くお好み焼き屋（広島）店主は広島県人に土下座して謝るべきだ。というか粉物を愛する全ての人に対して焼き土下座しろ。

看板商品がフルーツ寿司の寿司屋「出目金」果物と酢飯、だけならまだしも塗られた煮きりが妙に不味く絶大な不協和音を奏でる。ワサビの代わりに塗られたチョコやジャム、蜂蜜がクリーンヒットだ。味を表現するなら……煮きりが焦げ臭くどす甘い。

もう一つの名物、ウシガエルのオタマジャクシの内臓を抜き酢で締めご飯を詰めた何処かの名物オタマ寿司をパクッたとしか思えない（出目金寿司）はその造型に口に入れる事さえ出来なかつた。まさか中身を抜かれ酢で締められた出目金があんなに見ていて辛い物とは、結構予想外だ。

このラインナップでは夜袴が嫌がるもの分かる。どの店も共通点として掛値無しにマズイ。身をもつて俺には分かる。

「それなら交換条件だ。」

鞄からレポート用紙と資料を出し夜哀の前に置く。

「俺が飯を作つている間少しでも良いからレポートを進めておいてくれ、もう書き写せば良いだけにしてあるから。」

「良いよ、コレで契約成立だね。」

ニヤリと妙にしてやつたりの顔を浮べる夜哀に騙されたような気がしないでもないが取りあえず夜哀に手渡されたエプロンを手に台所に立つ。

「冷蔵庫の中のモノ好きに使って良いから~」

お馴染みの眼鏡を掛けたガキの情けない声と一緒に聞こえてきた夜哀の声に、さらに何処で手に入れたのか聞きたいような聞きたくないようなリボンとフリルだけの黒いレースエプロンを見てしみじみと騙されたような気がした。

番外編 玖韻玲音の日常？（前書き）

番外編になります。本編には一切関わってこない筈ですので宜しければどうぞ。

番外編 玖韻玲音の日常？

俺の通う大学に玖韻というヤツがいるのは結構有名な話だつた。本名は誰も知らない。ただ、自己紹介の時には玖韻と名乗り皆も玖韻と呼んでいた。

実際の所ウチの大学の学生に間違いはないのだから学生課に問い合わせれば名前ぐらい教えてくれるのだろうが、そこまで動く気力は沸かない。何しろ自他ともに認める不精モノなのだから仕方が無い。

それはさておき
閑話休題。

さて、玖韻という人物を簡単に表すなら、その顔は何処までも美形、嫌味を通り越し呆れるほどに美形。その性格は何処までも不明、残酷なのに優しく、冷静なのに単純、歪曲的かと思えば直情的、感情豊かなのに無表情。ただ破綻している。

何時だつて漆黒の服を身に纏い、自分の感性を刺激する物を求めてフラフラと動き回る雲か風、そんなヤツだ。

俺はと言えば共通するのは酒好きな事くらい、見た目も普通なら、性格だつて各種診断をやつてみた所どれも普通の結果だつたという玖韻とは正反対のような人間である。なのに、何故か玖韻とは気が合つ、というよりも一方的に玖韻が俺を誘つてくる。決して悪い気はしないものの以前何故かと尋ねて見ると、「キミはねボクの知的好奇心を満足させうる性質を持っているんだ」とよく分からぬ答えが帰つてきた。

俺と玖韻の出会いについては少々長くなるので割愛する。機会があれば話す事もあるだろう。

もつとも俺にとっては結構忌わしい記憶なので話さない可能性のほうが高いが。まあそれはそれだ。

さて、話は変わるが、当時俺は焼酎が大好きだった。

米焼酎や麦焼酎は癖が無くていくらでも飲めた、蕎麦焼酎も飲んだし、ほのかに胡麻の匂いがする胡麻焼酎や少し癖の強いのがまた美味しい芋焼酎、それに栗焼酎なんて堪らなく大好きだった。そんな焼酎大好きな俺が突如全く飲めなくなったのには玖韻が関係している。

そしてその日も俺は玖韻に呼び出されていた。

呼び出された所は最近お気に入りの居酒屋その名も「五百釣」俺も以前玖韻と一緒にきたのだが圧巻させられたのはその（お品書き）と銘打たれた小冊子にずらずらと並ぶ地酒の数々、店主が胸を張りながら百種類何時でも揃えていますという言葉に玖韻が狂喜しそれ以来三日と空けず通つている店だ。また、酒だけじゃなく肴も中々イケル店だった。

扉を開けるとそつ広くもない店内を見渡すまでも無くカウンター席に腰掛け上機嫌な顔で猪口を口に運ぶ玖韻の姿が見える。

「いらっしゃいッ」と威勢の良い声を聞きながら俺は玖韻の隣に腰掛けると間断なく目の前に突出しとお絞りが置かれ眼が妙に恐い胡麻塩頭の大将が「ご注文は」と聞いてくる。六時という晩酌には少し早い時間だと分かつてはいるが、酒好きの俺が厨房の方から漂つてくる匂いに耐える事が出来る訳も無く、普段なら焼酎を頼む所だが隣で玖韻の飲む酒の匂いに誘われ「久保田の千寿を冷で肴は適当に」と注文したのを見計らつたように玖韻が話し掛けてくる。

「遅かつたね、確か五時ぐらいに電話したと思つたけど？」

綺麗な顔を朱に染めそう言つてくる。相変わらずソッチの気の無い俺でさえ心が揺れ動きそうな顔だ。

「しょうがないだろ、今日は五限田迄あつたんだから、俺の所為じゃないよ、それとも何か？俺に授業サボつて来いっていつののか。」

「そうだよ、当たり前だろ。」

涼しい顔でそう言い放ちわざわざ持ち込んでいる漆器の杯を口に運ぶ。

まあ俺ももう呆れたりしない、玖韻のこういった物言いは何時もの事だ、取りあえず相手に無茶を言いその反応を楽しむ。悪趣味には違いない。

「ハイお待ち」

その声と供に俺の前にも徳利と猪口が一つそれに海月の和え物らしきものが入った小鉢が置かれる。

まずは一杯。溢れんばかりに注ぎ、口を近づけ溢さない様に一息に飲む。

ああ、美味しい。

「まったく、にやけた顔して、呑つて幸せだね。」

玖韻が新しい徳利を受け取りながら言つてくれる。

「ほつとけ、何の憂いも無く自分の金で呑い酒が呑める。コレ以上の幸せがあるか。」

「枯れた十代だねキミも」

玖韻が顔に皮肉な笑みを浮かべまた猪口を口に運ぶ。

その後俺達は暫く無言で呑み続けた、元来俺は無口とは言わない
までもあまり喋る方ではない。玖韻はその辺りが適当で喋りたい時
はとどまる所を知らず、さながら機関銃や鉄砲水のように口で喋るかと
思えばピタリと口を閉じたまま何時間でも下手をすれば日長一日何
も話さず終わってしまう事もある。どうやら今日は後者の方らしい。
その後一時間ほど一人で黙々と酒を飲んでいた時、唐突に玖韻が口
を開いた。

「キリははさ、薬用酒つて知つてるかい？」

俺より早く来てその上俺より早いペースで杯を重ねている筈の玖
韻だが少し頬が明らみ白い顔が益々白くなっているだけで他に変化
も無い。

「薬用酒つてアレかよく宣伝でやつている滋養強壮とかのヤツか？」

あのずいぶん毒々しい液体、以前一度だけ飲んだことがあるが隨
分薬臭く不味かつた覚えがある。

玖韻は首をふるふると振り違つよと言つ。さらさらうな黒髪が妙に
艶かしい。

「もつと広義の意味での話だよ、例えば梅酒、杏酒、花梨酒とかね
今は普通に水割りとかで楽しむけど昔は薬効効果を求めて作ったも
のだったんだよ。他にも沢山あるよ例えばウオツカだつたらズブロ
ツカとかさテキーラなら芋虫を漬込んだグサノ・ロホ、日本だつた
らハブ酒とかマムシ酒それに岩魚の骨酒とかもあるね、尤も最後の
は薬用酒とは言いがたいけど。」

と、また杯を呷る

「要はあれが、アドヴォカートとかの事だろ?」

「いやそれは違つよ。」

玖韻がやんわりと否定していく。因みにアドヴォカートとは卵とブランデーをブレンンドした濃いリキュールの事でかなり甘い。俺は苦手だ。

「それを言ひ出したらリキュールやジンなんか皆薬洋酒の分類に入るだろ、まあ確かに元々ジンは薬用として開発された物だけや、ボクがここで言いたいのは何かモノを漬込んで造つた薬用酒の事なんだよ、分かる?」

と、疑問調で投げかけてきた癖に俺の答えなど無視し新たに酒を注文している。

「それで結局何が言いたいんだ?」

玖韻が徳利を受け取り杯に並々と注ぎ、一杯呑んだのを見てからそう聞くと実に楽しそうな笑みを浮かべ、ちらに顔を向けると小声で切り出していく。

「実を言つとね、最近面白い情報が入つたんだよ。」

一皿言葉を切りまた一杯。

「何でもね、凄い薬用酒があるつていうんだ、その名も首酒。」

「ぐびざけ?」

「そう、何でも造り方は純度の高い焼酎或いはウォツカ力とか蒸留酒に各種動物の頭だけを、蜥蜴や蛇に始まって蝙蝠や飛蝗それに亀や魚、終いには猿。つまりは脊椎動物から無脊椎動物まであるとあらゆるといえば言い過ぎだけど何種類もの頭を漬込み何年も寝かせて置くそうだよ、そうするとねゆっくりと頭から脳内麻薬とか各種ホルモンとか色々解明し切れていらないような成分がゆっくりとゆっくりと染み出してきてえもいわれぬ味になるって言うんだよ、呑んでみたいと思わない？」

思わず想像してしまう。

無色透明な液体が満ちた大きな瓶、そしてその中に浮ぶ幾つもの頭、どれもが恨めしげに此方を見ている。

正直かなりエグイ。

「俺は思わん」

俺の言葉に玖韻が心外だといった声を上げる。

「何で、人生は短いんだよ、次は無いかもしれない。呑める時に呑むべきだって。」

ふと、玖韻の物言いに俺は引っかかる物を感じた。

「おい、まさかその首酒とやら……」

玖韻が喜色満面に頷く。そして大将に何やら目配せをする。すると三白眼どころか上下左右と四白眼の大将が厨房の奥に引っ込み何やら巨大な、一抱えはある巨大な瓶を台車に乗せ運んでもくると店員と二人掛けで持ち上げドンといつ音を立てカウンターの上にそれを置いた。

中の液体は赤黒く濁つており中に何が入っているのか全く見えないが、嫌な予感がする。

「ジャーン、首酒登場！」

嫌な予感大当たり。

俺の嫌な顔も余所に大将が小振りな切子グラスを出すと瓶の下部に着いている蛇口を捻り赤黒い液体を八分目程注ぎ俺と玖韻の前に置く。

何とも言えない強いアルコール臭に混じつて甘ったるい纏わり付くような、生生しすぎるほどに血腥い匂いが漂う。店内は静まりかえり俺と玖韻の動作を一拳手一投足見逃さないとばかりに見てくる。無理もない。いきなり赤黒い液体で一杯の巨大な瓶が出てきてその中身を飲もうというんだから注目しないほうがどうかしている。

そんな目を気にする様子も無く、玖韻が赤黒い液体で満たされたグラスを持ち上げ口をつける。白い咽が上下に動き一息に赤黒い液体は玖韻の口の中に落ちていった。

「つふう、結構野趣のある味だね、キミも呑みなよ。」

何でコイツはこんな怪しい液体を一息に、そう思いながらグラスの中を覗いた時だつた、グラスに付着した一本の毛。

駄目だもう呑めない。

大将が言つには動物の頭は毛を落とし眼球を抜き下処理してから漬けるというがたまにはそり残しが在る事もあるという。

さらに良く見てみれば妙な鱗のような物や皮のような物、ざるりと濁つたゲル状のモノ、兎に角得体の知れないモノが表面に浮んでいる。

赤黒い液体からは血腥い匂いと焼酎の匂いが混ざりあって立ち上つてくる。いつもなら恋焦がれるほど好きな匂いなのに、今日はも

う吐きそうだ。

その時、奇跡が起きた。

震度で数えれば大した事はない。せいぜい一か一だつただろう、ただ、カウンターを揺らし巨大な瓶を床に落とすには十分な揺れだつた。

瓶が床に落ち派手に割れ、中身が出た瞬間店内は大混乱となつた。それを、碎け散つた瓶の中身を見た瞬間俺は床に吐き散らしながら氣絶した。

一日後、俺と玖韻の二人は警察の事情徴集が終り帰途に着いていた。

あの時、瓶の中から出てきたのは玖韻が言つた通り大小様々な生物の首、そしてそれに埋もれるように半分骨が覗き所々溶解し青白く膨らんだ人の首だつた。

つまりあの店の首酒とは人の首をも漬込んだ酒だつたわけである。帰り道の途中、呑んでもいないので未だ吐き気が治まらない俺を余所に、その酒を呑んだ玖韻はといえば全然平気な顔で「結構美味しかつたんだけどねえ」と言つていたが聞かなかつた事にしておこう。

後日談になるが、あの店内からは他にも同じ処理を施した首が數十個見つかりその中には捜索願の出ていた行方不明者も結構いたらしい。当然の事だが店は閉店となり今では更地となつてゐるが、玖韻はただ「良い店が無くなつた」と嘆いている。

以上が焼酎を飲めなくなつた所以である。

第一幕 出発？

「（）馳走様でした。」

「……お粗末様。」

ぺこりと夜哀が頭を下げ銀髪がさらさらと肩の上を流れ落ちるのを何となく見ながら呆れ半分に俺は答えた。

あの後、冷蔵庫の中に何があるかと見てみれば冷蔵庫の中はエビスビールの500ml缶で一杯。野菜室は自家製梅酒が15？瓶で一本。冷凍庫の方はロックアイスと冷やしたジヨツキ、それにウオツカとジンのボトルが入つていただけ。念の為に台所にある床下収納を見て見るとワインにラム、ウイスキー、ブランデー、カルバドス、各種リキュール、ジン、清酒、白酒、日本酒、焼酎が数種類ずつ、どれも抜群に美味しい事と引き換えに値段も抜群にお高いものと水割り用のケースに入ったミネラルウォーター、銘柄は夜哀一押しの竜泉洞の水。トニックウォーターが、それもどこから持つてきたのか日本国内じゃ流通してないキーネが配合されているヤツが数瓶、各種柑橘類系100%ジュース、それも濃縮還元じゃないモノが数瓶。後は小さな戸棚に入ったマドラー、ミキシンググラス、シェイカー、つまりはカクテルに必要な道具と細い足の洒落たカクテルグラスが数脚を筆頭にタンブラー、ショットグラス、杯、猪口、ぐい飲み、ロックグラス、……つまり食材は全く入つていなかつた。普段何を食べて暮しているのかと考えながら買い物に出かけポークソテーにしようかと豚肉を買って買えると「今日はお肉の気分じやない」と我慢を言う夜哀と暫し口論をした結果、俺が負け再び今度は野菜と魚介類を買って来て夏にも関わらず寄せ鍋を作ったワケだが……

改めて鍋の中を見てみる。具が粗方終わった所で下茹でしておいた餃餃を5玉入れた箸だが、汁すら残っていない。

田の前で冷やしておいたジョッキにウォッカのビール割りという恐ろしいモノを、ビールに比べてウォッカの量が遥かに多い物を注ぎ嬉しそうに飲んでいる夜哀を見る。お腹が膨らんだ様子は外見からは全く分からぬ。一体この華奢な体の何処にあの大量の具と餃餃は消えて行つたのだろう?

「でも湊つてちゃんとしたご飯作れるんだね。」

「材料と知識、ある程度の器用さと気力さえあれば誰でもできるよ。少なくとも愛情なんてモノはいらないしな。」

「そう? ボクは料理苦手だから。」

前に一度だけ見たことがあるが、少なくとも米を磨ぐと言つて砥石でかき混せてみたり、包丁を持った方の手を切つてみたり、電子レンジを爆発させたり、台所を全焼させたり、一回の調理で調理器具を全て駄目にするのは苦手どころのレベルじゃない。というかそんな事を現実に出切るヤツがいるとは想いもしなかつた。

夜哀が注いでくれたウォッカのビール割りを飲みながらそう思う。口に出した所で聞いたらあえて言おうとは思わない。

ちなみにウォッカのビール割りは思ったより味が良いが、強いなコレ。田の前で夜哀が俺の数倍濃い物を平気な顔で飲んでいるのそんなん事言えないが。

「今日得した事は湊の手料理が食べた事とエプロン姿が見れた事だね。」

ほつといて貰いたい。

何が哀しくてあんなフリルとリボンだけの非実用的なエプロンを着なきやいけないのか、エプロンはシンプルなのに限る。色は口で決まりだ。

「ねえ湊？」

「あん？」

折角俺がエプロンについて考えているのに夜哀が話しかけてくる。因みに裸エプロンは好きだ。裸エプロンに関してはリボンとフリルだけでも許せる。

「あの人覚えてる？」

思わず裸エプロン姿の夜哀を想像してしまいその想像をウォッカのビール割りと一緒に飲み下す。

「あの人って言われても該当するのが沢山いるんだけど、名前で言つてくれよ。」

「あのね、玖韻^{クインレイ}澪璃さん。」

「ブッ

その名前に俺の口から勢い良くウォッカビールが飛び出る。

「気を付けなよ、はいティッシュ。」

咳き込みながら口とちやぶ台に飛び散ったウォッカビールを拭き同時に頭の中に澪璃さんの事が浮ぶ。

玖韻澪璃。
クインレイリ。

和服が似合う長身スレンダーな美人。そして俺を含むサークルメンバーが連續殺人事件にあつた時の関係者というか犯人というか実行者というか……そして少々罪悪感と呼べるようなモノを感じる人。

「…………あの、澪璃さんがどうかしたのか？」

「うん、手紙が届いたんだ。」

「手紙い？」

「そう、何かねあの人の経営してる旅館の改修工事がすんだからその記念も兼ねて本格的なシーズン前にボクと湊を招待したいって。」

全身をぞわぞわと戦慄が駆け抜け鳥肌が立つ。

「…………夜袴、お前行くつもりか？」

「うん、この頃暇だつたしね、偶にはあの人に遊ぶのも楽しいんじゃないかな。」

「お前、今度は本当に殺されるかもしれないぞ？」

そう、脅しではなく多分、いや確実に殺されまではされなくても何かやられる。実際俺は前回逢つた時殺されかけた。5分の3殺し位だ。

「大丈夫でしょ、ボクと湊の二人に勝てる生命体なんてそつそついなによ。」

」の無根拠の自信は何処から…………つて二人？！

「夜哀、お前…………まさか…………」

「うん、湊と二人でお伺いしますつてもう返事出しどいたよ。」

謀られた！

「もしかして、湊一緒に行つてくれないの？」

俺の気勢を制するように、いや実際制して夜哀が哀願の目で俺を見てくる。左右わずかに色の違つ深紅の瞳は潤み、雪の日に震える子猫のような目で…………いや実際にそんなラブリーなモノ見たこと無いが…………

「…………分かつた俺も行く。」

想いとは裏腹に口がそう答えていた。

「湊ならやう言つてくれると思つたよ、ほら切符も同封されてたんだ。」

夜哀の指の中でペラペラと舞つ切符を見ながらこの日俺は二度騙されたと思っていた。そもそも自己防衛機能が働き夜哀に騙される事を喜びにすり替えそうな自分が怖い。

第一幕 出発？

翌々日、レポートだけ提出し、そのまま授業はサボリ駅に向かつた憐れな俺は少し早めの夏休みと自分に言い聞かせ夜哀と新幹線に乗り込んでいた。向かう先は長野県。約三時間かかる道のりを夜哀とそれこそどうでも良い会話をして過ごした。例えば「坊主が屏風に上手にジョーズの絵を描いたたつけ、それとも坊主が屏風に上手に坊主の絵を描いたたつけ?」とか「イントロン情報の解析に関して互いに思う事を言おうよ。」とかアカデミックに聞こえるような聞こえないようなどうでもいい一々思い出すのも罵廻らしいような話だ。

唯一気になつた話も在る。途中の駅で子供が乗り込んできた時の夜哀の言葉だ。

「ボクね、小さい子供がキレイなんだ。」

「どうして?」

「小さい子つてさ、全員が必ずしもそういうじゃないけど大抵全身に希望が満ち溢れていて目が澄んで未来に向かつて輝いているでしょ、ボクねそれを見るどりうしょもなく苛々するんだ、あの未来に輝く瞳を濁らせて満ち溢れる希望の光を搔き消して上げたいと思つんだ。生きる事は苦痛だつて教えて上げたいんだよ。

もつとも小さい内から世の中の機微きびをわかっていて不幸を背負つたみたいな顔をしている子供はもつとキレイだけどね。アレ? だつたら子供は無邪気な方が良いのかなあ?」

と夜哀は何とも複雑な笑みを浮かべながらそつ疑問系で閉じた。

何があつたかは知らないがあまり趣味の良い話ではない。生きる事が苦痛に満ちているという言葉に関しては概ね賛成できるが。果たして俺の今までの人生は苦痛に満ちていたかと考えみると……結構苦痛塗れだ。もつとも俺の主観的問題であつて客観的にみればどうという事もない人生かもしれないがそんな事はどうでも良い事であつて、要は俺自信がどう思つかが重要つて事だ。で、改めて俺自信がどう思うかと言えば紛れも無く今までの人生は、少なくとも夜哀に合つまでは退屈で怠惰で惰性で動いているような緩慢な苦痛に満ちている。

さて、長野県は松本市に到着し、国宝の松本城や温泉等観光地を見る事など一切無く、タクシーというブルジョワジーな乗り物を駆使して俺と夜哀はソコに訪れていた。

陰陰滅滅いんいんめめつと生い茂つた森が見えた頃。俺達はそこでタクシーから降ろされていた。理由は三つ。まず夜哀がタクシーの中で度々外の景色を眺めながら「あそこで事故が遭つたよ、二人死んでる」とか「さつきのトンネル大分迷つてるのがいるね。」とか嘘か真か知らないが、一般的に考えて知りたくないような情報を延々と口走り運ちゃんが辟易していた事。

俺も調子に乗つて詳細を求めたから文句は言えない。

次にココから先車は入れない。歩いて行くか、根性があるならスキップや匍匐ほふ前进ぜんしんでも構わないのだが、要は歩行者用通路しかない事。

三つ目に運ちゃんが本気で嫌がつたからだ。話を聞いてみれば幽霊が出るの怨霊が出るのJMAが出るの妖怪が出るの祟神がでるの不幸な目に逢うの、あの澪璃さんの経営する旅館の近くとなればさもありなん。しかも話を聞いているとその旅館の存在は結構有名らしく泊まれば確實に妖しいモノが見られる或いは妖しいモノに関わると言つ事で一部のマニアには大人気らしく固定客もいるらしい。俺と夜哀もそういったマニアだと誤解されたのだろう。

結構迷惑だ。

さて、夜哀曰く玖韻一族とは
全てを欺く者

黄昏に笑う道化師

リリスの末裔^{まつえい}

血と狂氣の中核

混沌を振り撒く者

月に吼える者

這い寄る混沌

とまあ上げれば切りが無く、字面を見るだけで碌でも無い連中だと言つ事は痛いほどに伝わつてくる。何でも夜哀の一族、つまり夢幻家は玖韻一族のライバルだという。本質的には同じタイプなのだがそこはそれ、近親憎悪の言葉もあるように、自分に似ているヤツは憎らしい。という事で今まで裏表問わず結構ぶつかり合つてきたらしい。

何故らしいのかと言えば夜哀が微妙に言葉を濁すからなのだが、詳しく述べたいという気持ちと知りたくないという気持ちがまだ俺の中で均整を保つてゐる今はこの灰色のままで良いと思つ。それは置いておくとしてそんな玖韻一族と夢幻家でも夜哀と澪璃さんは年齢も近く互いにライバル視しており今回の澪璃さんからの手紙は夜哀に対する挑戦状ともある意味言える。

そんな訳で俺と夜哀はさつきから夏の最中にも関わらず何処からか底冷えするような風が吹き、重い湿気が肺を満たす空氣の流れる鬱蒼とした森の中辛うじて人の歩けるレベルに舗装されてい道を歩いている。

タクシーの運ちゃんに聞いた所だとこの森、通称逢魔ヶ森。^{おひまがもり}正式名称不明。その名の通り下手に入ると魔に逢つてしまふ森だという。磁気場が異常だとか言う事でコンパスは使用不能。それどころか生物の生体磁石まで狂わすらしく元からここに生息しているモノ以外鳥や小動物の類も近寄らないという富士の樹海も真つ青な森だと運ちゃんは言つていた。さつきから木々の枝先から垂れ下がった先が

輪つかになつたロープが妙に田につくのは磁気場が異常な所為だと自分に言い聞かせている。

「ねえ良いもの見つけたよ。」

夜哀に渡された凶悪に彎曲した形状が愛らしいグルカククリで草を薙ぎ払い踏み固めながら歩いていた俺はその声に振り向くと、夜哀が手に持つた人らしき頭蓋骨を掲げて見せる。

「ほり、信長みたいに杯でも作ろうか?」

「…………捨てるそんなもん。」

そう言い捨て俺は草を薙ぎ払い柔らかい腐葉土や苔むした土で出来ている地面を踏み固めながら前に進む作業を再開する。ハンカチで拭つて包み込んだ頭蓋骨を鞄に入れている夜哀の姿が見えるが何も言つまい。

今日の夜哀も相変わらずの姿だ。細身のレザーパンツに先の尖つた黒いレザーブーツ。上はタイトなレザージャケット。前に暑くないのか聞いたら基礎体温が低いと言つ答えが返ってきた。首にはレザーコードのチョーカー、スター・サファイアのチャームが光つている。銀髪は何時も通り束ねたりせずストレートに降ろしたまま。顔には向こうが見えているのかどうかすら疑わしいほど黒いサングラスを掛けている。

荷物は俺に背負わせ氣楽なモノだ。とはいっても小振りなトランク一つだけだから楽な物だが。

何か後で言つてくる夜哀の言葉を適当にいなしながら歩く事約一時間。突然森を抜け開いた所に出た俺はそのまま呆然としていた。

「…………お夜哀?」

「なーに

「…………か?」

「そうじやないの、他に建物らしい建物なかつたし。それに住所もココだよ。」

唐突に立っている古めかしい立て看板に書かれた住所を夜哀が澪
璃さんから貰つた手紙に同封されていた地図に描かれた住所と見比
べている。

…………だからといつてこの外観はどうだらう?

俺の立つ位置から巨大な屋根付きの門が見える。よく時代劇に出
てくる大名屋敷の前に立つてているアレだ。ただその奥が違う。門番
もおらず開放された門の向こう側には何故か段々と大きくなる様等
間に朱色の鳥居が設置されている。遠目に見ても昨日今日に出来
た新しいものではない。さらにその鳥居の奥にその屋敷はあつた。
外見からは何とも言えないが何度も増改築を繰り返したのか一点
を見ている筈なのにだんだんと視線が分散してしまつようだ。長時
間見ていると頭痛がおきそうな古びた和風の屋敷がそこにはあつた。
こうして見ただけでは一体何階建てなのかすら分からぬが、横
にも縦にも驚くほど大きく幽靈くろんじょうとか悪靈以前にこの屋敷自体が怖い。
一度見たことのある中国の九龍城に似てなくもない。

さらに言つなら四国は道後温泉のアノ建物に似ていなくもない。
つまり、九龍城を純和風に改造し数十倍複雑に数百倍禍禍しくさ
せた感じだ。

「…………夜哀、今更何だが帰らないか?」

「それは駄目だよ、折角招いてくれたのにココまで来て帰るなんて

澪瑠さんに悪こよみな気がしないよつなるよつな。」

どつちだよ。

「それにこれからまた今の森を越えて行く？ボクは嫌だよ、それとも湊は疲れてもう歩くのがある口起きたら「キミ今日から世界連盟総理事長。就任オメテト」それじゃ早速国家間問題全部何とかしてね、実費で」何て言われるぐらに嫌なボクをこんな万魔殿に置いて一人で帰るの？「わー薄情者、鬼、悪魔、外道、悪逆非道、鬼畜、ロリコンー」

まるで感情が籠つていらない夜哀の罵詈雜言。
だが、一つだけ聞き逃せない言葉があつた。

「待て、ロリコンだけは許せん。」

「どうして？前琉伽ちゃんの事可愛いつて言つてたでしょ？」

ウツ

否定できない。

「ロリコンロリコンロリコン」

しかも歌つか

けど琉伽ちゃんは十七歳。

十九歳の俺が十七歳の女の子を可愛いと言つたら性犯罪者のよつな言われ方を受けなければいけないのだらつか？

確かに幼い外見だが

まあ、いいや。

必死で「良いのか？」とつゝこんでくる俺の半身は無視しておこう。

しかし、後半の、今だ止まないロリコンの歌は兎も角前半部分は中々的を得ていた。いくら夏とは言えそろそろ日が暮れ始めている。生憎俺は日が沈んでからもう一度今の、先が輪になつたロープが不自然な程に目に付く森を通ろうなんて度胸は持ち合わせていない。それに慣れない道を歩いた所為か足が痛い。

鈍^{なま}つてゐるなあ。

「ね、さあ行こうよ。」

何だかサッパリした顔で、（アレだけ歌えばサッパリするだろ）（な）夜哀が俺の手を取り先に進む。

門を潜る時チラリと「忘我邸^{ぼうがてい}」と書かれた看板が目に入る。

風も無いのにぱさぱさとはためく、屋敷の上に乱立する細い深紅の旗を見ながら口ではああ言つたモノの実際はコレから何が起きるか期待していいる自分に気がついた。

第一幕 遭遇？

眼下に石灯籠が見える。

屋敷の回りを囲む様に敷かれた石畳の回りを沿う様に石灯籠が並んでいる。

名前は全くわからないが様々な形の物があり、また中に灯りが入つていて仄かに光る様は中々風雅で見ていて面白い。

俺が何処にいるのかと言えば忘我邸一階らしき所の渡り廊下から中庭を見渡している。

あの後忘我邸に入つた俺と夜哀は耀耶麻楓テルヤマカエデと名乗る和装のお手伝

いさんに案内され既に夕食の用意の整つた部屋に通された。

楓さんは本来なら凌瓈レイリさんが対応する筈はずだったがちょっと席が外せないと言う事で代わりに案内する事を恐縮していたが、俺としては在り難いの一言に尽きた。

取りあえず今日はゆつくりと寬いくつろいでほしいと通された部屋は外見からは想像できない程に立派な和室だった。畳表も新しく青々とし、あの禍々し過ぎる外観からは想像もつかないほどに清浄な空気が満ちている。

夕食を終え夜哀は「お風呂入つてくる。」と言つて地下大浴場に向かい、俺は一人部屋にいてもやる事がないので缶ビール抱えっこでこつして夕涼みをしている。

何となく灯籠の数を数えていると涼しい風が吹いてくる。適度に湿つた涼しい風が頬を撫で、廊下一杯に吊り下げられた簾がかさかさと音をたて、どこからか風鈴らしき澄んだ鈴の音が聞こえてくる。悪くない。

これがただの旅行なら言う事ないのになあ……
そんな事を考へていて矢先だった。

「あら、湊様お久しぶりですね。」

その声に背筋が凍る。

首筋を冷たい何かがするつと撫でる。その感触に震えながら振り向く俺の眼前一杯に澪璃さんの顔はあった。

間近なんてもんじやない、鼻の先が少し触れた。

「れつ……澪璃さん……」

後ずさる俺の姿を見て澪璃さんがくすくすと笑う。

肩を越す程度に伸ばされた真っ黒な髪、真っ黒な瞳、白い肌。夜哀が病的かつ異質な美人だとしたら此方は問答無用に人の美人だ。ただし決して陽性の美人じやない。陰性の、とことん陰性の美人だ。あえて花で表すなら……
銀龍草？

少し着崩れた黒地に朱の籠目模様が入った紺の胸元に覗く黒子がセクシーだが、この人にはそういうつた感情が全く湧いてこない。

「綺麗でしょ？この庭には今まで私達玖韻と遊んで下さった方々の屍が沢山眠っていますの、その陰火があんなに綺麗に……」

くすくすと笑う澪璃さん。

もしこの言葉が本当なら一体この一見風雅な庭には何百人の屍が眠つてているのだろう？というかアレ全部人魂か。

「お元気そうで何よりです。」

「……澪璃さんも、お元気そうですね。」

再びくすくすと笑いながら右目の位置に在る眼帯に触れる。

「今日の午後は『めぐなさ』、さよと所用でお迎えして上げられなくて。」「

「うつむいて話す分にはいつの無い同年代の女性だが、その本性は……」
エグイ。

「いえ、とんでもないです、……所で目の方は大丈夫」

そこまで言つて自分の辯闘^{べんとう}を呪う。
どんなに慌てていたつて俺は絶対にその話題に触れてはいけない
のこ、いきなり触れてしまった。

「フフフ、湊様に合つたせいしかし、今とても疼^{うず}いているの。」

澪璃さんが眼帯を外す。

右目がある位置にはポツカリと穴が空き暗いピンク色の肉壁を晒
している。左目は無いその笑顔がまた綺麗で、怖くて俺はもう一步
後ろに下がる。

「……一つ聞いても良いですか?」

恐る恐る尋ねてみる。腫れ物、それも熱を持ち、膿が飛び散りそ
うな腫れ物に触れる心境で。

「喜んで。」

凶悪に笑う觸體^{しよくたい}が描かれた眼帯を付け直しながら澪璃さんが頷く。

「その、何で俺と夜袞を招待してくれたんです?」

「あら、どうしてそんな事をお聞きになるのかしら？」

澪璃さんは虫も殺さぬといった笑顔を浮かべているが、その笑顔が怖い。現にこの人はその笑顔のまま俺の知り合いを再起不能にしている。

「……だつて……澪璃さんこの前別れ際に……」

そこで口を噤む。何だかせつから俺は言っちゃあいけない事ばかり言つてゐる気がする。

因みに分かれ際に言われた台詞は「今度は本氣で遊んでさしあげます。」この遊ぶの部分に普通は「殺す」とか「いたぶる」とか「いてこます」とか物騒な単語が入る。

「その事ですか、湊様覚えていて下さったんですね。」

内心脂汗だらけの俺を知つてか知らずか嬉しそうに言つてくるが、俺はちつとも嬉しくない。出来ることなら今すぐこの場から逃げ出したい。

「勿論、あの言葉は本気です。」

そう言つた次の瞬間玄人裸足の足さばきで俺に詰め寄ると何処に隠していたのか小さいけれど鋭く研ぎ澄まされたナイフが俺の首筋に当たられる。

「そう、こうして話している今でも気を抜いたら湊様の肌を切り裂いて私が『えられる限りの苦痛を『えて上げたいと思つてしまつも」

ナイフがツツと下がる。シャツの釦が飛び皮膚を切り裂き胸に赤い線が一本。

「でも、湊様はあの夢幻の末姫に気に入られた存在、そして私の右目を抉つたお方。」

そう、澪璃さんの右目は俺が抉つた。言い訳する気はないがある場面からすればどんな腕の悪い弁護士だって正当防衛で無罪を勝ち取れる。

澪璃さんの顔が間近に迫る。俺はその右目に突っ込んだ指の感触をまざまざと思い出していた。想像以上に固く、ぶちゅっと音がして生暖かいゲル上の物質に人差し指と中指が包まれたあの感触を。

「私達（玖韻）と同等に遊べる相手は少ないの、だから私は湊様の事も夜哀さんの事も嫌いだけど大好きよ。」

ナイフが動き今度は横に一本線が引かれる。抵抗は出来ない。抵抗すれば次の瞬間このナイフが俺の喉を抉る。或いはもつと悲惨な目にあう。

折角ここまで来たのだから退場にはまだ早い。

ペリリと澪璃さんの舌が俺の傷口を舐め、俺を見上げる。

「フフッ甘い血ね。」

「……血糖値は低い筈ですけどね。」

小さなナイフは何時の間にかまた何処かへ消え、澪璃さんが俺から離れる。

「湊様、この日の事は気になさらなくて結構なんですよ。コレは私が貴方の事を甘く見ていたペナルティ、それに私の目を抉った時の湊様のお顔。とても素敵だったもの。右目一つ分以上の価値はありましたから。」

ウツトリとした顔で言つてくるが、俺はあまり嬉しくない。どんなに極上の美人であるうとこの人は余りにも規格外だ。

「この傷跡は湊様からの大切な贈り物、私の大事な宝物。」

「……相変わらず……跳んだ思考しますね。」

いとおしゃれに眼帯を撫でる澪璃さんを見て強烈な皮肉を食いつている気がして思わず皮肉の一ツも口にしてみるが。

「あら、そんなに褒めないで下さい。」

……向こうの方が上手だった。

「そうそう、妹も湊様と夜袞さんに会いたがっていましたわ。」

「……琉伽ちゃんも来てるんですか？」

また俺の脳裏に芳ばしい記憶が甦る。

玖韻琉伽、俺を殺人犯に仕立て上げ誤認逮捕させた恐るべき高校生。

「ええ、今度こそ湊様をオトスつて張り切っていますわ。」

正確に言つのなら陥れるだ。

「それでは湊様、また後ほどお会いしましょ。」

何が面白いのか……多分俺が面白かったのだらう、くすくす笑いながら澪璃さんが渡り廊下の向こうに振り返ることも無く、滑る様に消えていく。俺はその場に無意識のまま腰を下ろしていた。胸の十字架が少し引き攣れたがそれ以上に澪璃さんの舌の感触が残つていた。…………だからといって全く欲情できないが。

すっかり酔いも覚めてしまい部屋に戻ると夜袴はもう帰つてきていた。濡れた髪と少し紅い頬が艶かしい。

「あれ、湊何処に言つてたの顔色悪いけど。」

「…………久しぶりに怖い目にあつたからな。」

「ふーん、湯上りのビールは美味しいね。」

俺の事など気にかける素振りなど全く無く、冷蔵庫から出した缶ビールの下に小さなナイフで穴を開けるとソーパンで上のフルトップを上げる。ショットガンかよ…………

「夜袴、お前一応女なんだからそういう飲み方はどうつかと思ひだ。」

ちよつと気にかけて欲しかったな等と思いつつそんな事を言つてみる。

「あれつ湊ボクの事一応女の子だつて思つてくれてるんだ?」

……なんだかううのしてやつたりの笑みは。

「一応も何もお前は女だろ？？」

「あのねえ、世の一般男性はボクみたいなちょっと変った外見の美少女がこんなに無防備でいたらもう少し積極的に行動起こす物なんだよ？」

確かに美少女だが自分の事を自分で言つのはどうかと思う。

「……だから？」

「湊もね、もう少し積極的になつてもいいんじゃないかなあって言つてるの。」

「そう言われてもなあ……」

俺を心なし赤い顔で見てくる夜袴に食指が動かないわけではないが、さつき澪璃さんの毒気に当たられたらばかりの今はとてもじやないがそんな欲求は起きそうにない。

「湊つて本当に淡白だよね、面白くない。」

何か言い返そうとしたが、やめた。

態々自分がいかに性的欲求がある人間かを語つてどうじよつとうのか。

「さて、俺も風呂入つてくるか。」

「それがいいよ、イイお湯だつたからね。」

一瞬夜哀の口調に含みがあったような気がするが、気のせいだろ
う。

タオルと備え付けの、胸元に大きく（歓迎！忘我邸）と入ったセ
ンスの無い浴衣を持って行こうとする俺に夜哀が声を掛けてくる。

「湊つてさ、何か肉体的な接触を嫌がらない？」

俺はその間に苦笑だけを返した。

夜哀ほど波瀾に満ちていないかもしれないが、俺にもそれなりに
色々あったのだ。それなりに。

第一幕 遭遇？

「……「」は何処だ？」

大浴場を求めて歩く事約十分。俺は迷っていた。

何しろこの自称旅館は広すぎる。

どういう構造なのか見当もつかない。

部屋から持つてきた案内図も良く見て見れば明治漆年度版と印刷してあり見比べても通路が多くつたり少なかつたり、酷い時には在る筈の階段や部屋までもが在つたり無かつたり、もつと酷い時には足の下に天上があつて遙頭上に畳が在つたりで、全く役に立たず、それでもコレしか地図が無いので破り捨てる事も出来ず、幾ら見比べても今俺が何処を歩いているかすら定かじやない。その上何処を向いても畳敷きの部屋と漆喰の白い壁と板敷きの廊下に襖と障子で構成された廊下が延々と続き性質の悪い迷路に迷い込んだ感じだ。さつきから何度も階段を上つたり下つたりしている。

今いる所は螺旋階段をずっと下つた末着いた場所だ。上を向けば天上は遙に高く薄暗い闇があるだけで見えない。俺は本当に建物の中にいるのだろうか？

漆喰の壁に埋め込まれた丸いガラス窓の向こうに朱色の鳥居が見えるが、多分この通路を通るのは3度目だ。目印に悪いとは思いながらも付けておいた小さな傷がそれを示している。

そもそも俺は地下にある大浴場に行くために階段を下つた筈なのに何故気が付けばこんな高い位置にいるのだろう？第一俺がさつきここに来た時は一度も階段なんて使わず部屋から真っ直ぐ来たら出てしまつた筈なのに。悪夢のようだ。

無限ループに入りこんだような気さえする。しかもさつきから俺一人だけのはずなのに周りから視線を感じたり妙な笑い声や鳴き声

が聞こえて来たり、酷い時には廊下の隅や中庭に黒い影が蹲つたり天を妙なモノが逆さ向きで這つていつたり、外の大鳥居の上から何だか表現しようのないモノが此方を見ていたり。流石は澪璃さんの経営する旅館だ。悔れない………というか素直に恐い。

せめて方角だけでも知りたいと腕時計に付いたコンパスに目を向ければコンパスの針はモーターでも付けたかのように加速度的に回つていて。失念していたが、ここはそういう場所だった。屋内にも関わらずだんだんと絶望的な気分になってきた。

そうだ！と思出した携帯には無常にも圈外の一文字が浮び上がつている。

立ち止まつて色々考えた所で物事は解決する筈も無く、取りあえず歩いていればその内どこかに出るだろうと楽天的な答えを出して歩き出した俺が耀耶_{テルヤマ}さんに逢えたのはさらに三十分程迷つてからだった。

「そうですか、それは御災難_{じさいなん}でしたね。」

臙_{えんじ}脂色をした和装姿の、具体的には昔映画で見た大正、昭和初期のカフェにいた女給チックな格好の耀耶_{テルヤマ}さんが俺の話に相槌を打つ。お好きな人には堪らない。かくいう俺も嫌いじやない。大げさじゃなく命の恩人じやあなければ酔つていたら口説いてしまうかもしれない。

赤の強い栗色の髪を纏めた大きなリボンが妙に似合つている。

「本当に助かりましたよ、洒落_{シャレ}じやなくて遭難を覚悟しましたから。」

「實際耀耶_{テルヤマ}さんに声を掛けられた時不覚にも涙が浮んでしまつた。

「無理もありませんね、この忘我邸の設立は古く、古代はかなりワ

ケ有りな墳墓だつたと言われています。きちんとした建造物という力タチをとりだしたのは平安時代の終わりらしいのですが、それ以来約1200年、基部を中心に改修、改造、改築、増築を繰り返している上に澪璃さまの趣味であちこちに磁気発生装置や妨害電波発信機（シグマ）を設置して人の方向感覚さえ狂わす様にしてありますかし、電子機械類に至つては余程強固にシールドがされていないと使用が利きませんから。」

「あの……何の為に？」

耀耶麻さんは一ツ「ひとつ笑い

「ああ?、きっと趣味だと思います。」

と云つ。流石は澪璃さんだ。

「多分お客様が館内で迷われて右往左往しているのを何処かで見るのが楽しいのでは無いかと。」

うん、琉架ちゃんが高笑いし、澪璃さんが優しく嗤つてている姿がありありと浮かぶ。

「だから年末の大掃除は大変なんですよ、毎年白骨化したり腐乱中の遺体が数人分見つかりますから。」

楚々と笑いながら恐ろしい事を云つ。

流石は澪璃さんの経営する旅館で働く人。この人も只者じゃない。それにしたつてこの界隈で一体何人死んでいると言つんだらう?。

「所で耀耶麻さん。」

「私の事は桺^{モリ}とお呼び下さい。」

「そうですか…… つてさつ^{カエテ}き楓^{モリ}つて名乗つてくれませんでしたか？」

「それは私の妹です。」

「妹、ですか？」

「ハイ、私達姉妹はここ忘我館で澪璃様にお仕えしております、私が長女の桺。先ほど比良坂様と夢幻様をお部屋までご案内したのは妹の楓です。」

桺と名乗った耀耶麻さんが笑顔でそう言つ。が、俺には正直その話が本當かどうかわからない。さつき俺と夜哀を部屋まで案内してくれた耀耶麻楓さんとやらと今俺の田の前にいる耀耶麻桺さんは似すぎている。

一卵性の姉妹かもしれないが似ているのは顔や背格好ばかりじゃない、雰囲気や間の取り方、声の質とかもそっくりだ。耀耶麻楓さんが桺と名乗つて俺をからかっているとしか思えない。

だからと言って同一人物ではなく本当に双子だという可能性も勿論ある。だからこの場合俺はどういう反応をすれば良いのかと言えば

「じゃあ桺さん？」

「ハイ、何でしょ？」

素直に耀耶麻さんの言つ事に従つ。考えて見れば一々反論する必要もないし本人がそうだと言つているんだからそれでいいじゃない

かといつ結論の末だ。

「それにしても随分似てらっしゃる妹さんですね。」

「そんな事ありませんよ、以外と似ているようで中身は全く違う物なんです。似ていると言つ事は結局別の物といつ事ですもの、比良坂様も直ぐに見分けがお付きになられますわ。」

恐らく無理だ。

「そうですか…………ところで大浴場は確か地下にあるんですね？」

「ええ、そうですよ。」

屈託なく桜さんが頷く。

「じゃあ何で俺達階段上つているんです？」

そう、俺と桜さんは先程から延々と階段を上つてゐる。どう考えてももう十数階分は登つてゐると思うのだが、そもそもそんな階段が全く折れたりせず一直線に造られているのが不思議でしうがない。

「大丈夫ですよ、少なくとも口口に関しては比良坂様より私の方がしっかりと知覚していますので任せ下せー。」

そこまで言つのだから桜んを信用しよう。しかし……時計を見なしても分かる。俺が夜袴に入つてくると部屋を出たきりもう一時間以上経つ。きっと今頃何をやつてゐるのかと思われてゐるだろう。

多分。

きっと。

……少しは心配してくれているよな？

…………ま、ちょっと覚悟はしておけ。

「比良坂様、こちらが大浴場になります。」

結局俺は桜さんの後ろについて歩き一回も階段を下らない内に地下に在る筈の大浴場へ着いてしまった。

俺が質問する間も与えず桜さんは「じゅつくりどうだ」と言いながら去つて行く。既然としないまま俺は男湯の暖簾を潜り脱衣場へと向かう。

楓さんが部屋に案内してくれた時に説明してくれた通り今は俺と夜哀以外客はいないと言つ事で脱衣所もがらんとしている。手早く服を脱ぎ浴場の扉を空ける。見事な岩風呂が中央に鎮座し、その回りにそれぞれ違う効能が記された小さな温泉が何種類も在る。中々良い風呂だ。露天風呂が無いのは少々残念だが、あの鬱蒼とした森を見ながらでは気分も凹みそうでかえつて無いのは正解かもしれない。そもそも地下に露天風呂があつたとしてどうしようというの俺よ。

岩風呂のお湯を手桶に汲みそつと手を入れてみる。全身猫舌の異名も持つ俺は熱いモノが駄目だ。温泉に限らず味噌汁やそう言つタイプの人間も。

熱くは無い。温い位だが俺には「レバライの温度が丁度良い。それに温湯にじっくりとつかる方が健康には良いそうだ。そんな柄じゃないが。

傍らにある温度計を見ると37度を示している。

早速身体を洗い泡を流した後手ぬぐいを畳み頭の上に乗せ岩風呂にゆっくりと浸かる。

一杯に湛えられたお湯は俺が肩まで浸かると溢れ排水溝に吸い込

まれて行く。あまり硫黄臭が無く白く濁つたお湯に湯花が咲いている。

それにしても何だか今日は疲れた。肉体的にも精神的にも。肩を揉み解しながら唐突に澪璃さんの言葉が甦る。

（妹も逢いたがつっていましたわ）

澪璃さんの妹こと玖韻琉伽ちゃんの事が甦る。琉伽ちゃんは夜哀と良く似た外見をしている。青白い肌に夜哀より少し蒼みがかつた銀髪にアイスブルーの瞳。小さく華奢な子で外見はどう見ても、どう頑張つてサバを読んでも十五歳以上に俺は見る事が出来ない。因みに今年十七歳の筈だ。それなら問題ないような気もするが要はどうやつても目付きと言動と行動以外は幼い外見なのだ。

さて、澪璃さんの妹なのに何故銀髪に青い目なのかと言えばコレにはちゃんと理由が在る。夜哀の血筋、つまり夢幻家が完全に少々特殊とは言え全員血の繋がりが在る事に反して玖韻一族は全く血の繋がりが無い。夜哀から聞いた話になるが玖韻は血筋ではなく家柄なのだそうだ。つまり玖韻家という玖韻の家も在る事はあるのだがそこに産まれた子供は玖韻一族かと言えばそうではなく、玖韻一族は見所のある人物をそれぞれ気ままにスカウトし、適正があるとなれば晴れて玖韻一族の仲間入りとなるらしい。そういう意味では家族というよりも秘密結社といった色合いの方が濃いかもしれない。まるで何処かの殺人鬼の一賊のようではないか。

だから琉伽ちゃんは澪璃さんより年下な為妹という位置付けだが、実際は血の繋がりも何も無い。因みに玖韻の素質はどれだけ自分が面白いと思つ事に他人を巻き込み躍らせ、如何に自分が楽しむ事ができるか。という事だそうだ。

こう言つとあんまり害が無いように感じるが、それでもない。何

しろこの玖韻一族は自分だけが面白ければそれで良いのだ。

自分が大笑いする為だけに戦争を引き起こし、大量虐殺を行い血

と狂気に哄笑を上げる者もいる反面、玖韻一族に共通する多大な力リストマを駆使し大々的な福祉活動を行つたりして博愛に微笑む者もいる。

因みに澪璃さんも琉伽ちゃんもどちらかもなにも明らかに間違い無く問答無用の言語道断で前者の方だ……というか夜哀が言つには玖韻の九割九分九厘が前者らしい。

だから俺と同年代なのに玖韻の代表格の一人として数えられるような澪璃さんや十歳頃には玖韻として覚醒してしまった琉伽ちゃんは正直怖い。

少なくとも自分の快樂の為だけにどんな禁忌も厭わない方向性は人として正しいとは思うが、どうにも許容するには難しい。

多くの善良な振りをしている世界や人々から見ればとことん異端で異形の一族なのは間違いない。なのに排他されないのはその存在があまりにも胡散臭く信じるに値しないモノのようにしか思えないからだ。

理解とか以前の問題でまず近しい存在でもない限り認識する事が出来ない一族。そして例え認識できても次の瞬間にはその認識したという事実ですら虚構にすりかえられている始末。

世界の影や闇に入知れず大々的に潜み、世界を裏から表から操りちょっとかいを出し緩慢に急速に狂わさせて行こうとする者達。

それが玖韻一族。

湯船に使つているにも関わらず思わず鳥肌が立つたのを機会に風呂から上がる。桜さんが態々書いてくれたらしい浴衣の上に置かれた大浴場から部屋までの詳細な地図に思わず感涙しそうになつた。

今度あつたらお礼を言おう。

しかし、桜さんて凄い人かもしれない。

どう見ても鉛筆書きなのに製図機で作ったような平面地図と立体地図の一枚にそう思った。

しかし、ドコの意地悪なダンジョンだこれ？

殺人機械デスマシンとか出でこないだろうな……

第一幕 招かれる客？ side 虚祇

「嫌とは言わせない、僕達をもう一度口々に泊めさせてもらひ。」

その男はレニエルさんに傲岸不遜な口調で言い切った。

細面に短く切つた髪と眼鏡が妙に似合つてゐるが人を見下したような印象を受ける顔だ。鴛淵先輩に少し似ていなくもないけど、目つきがかなり陰険な感じ。

「私は去年忠告しましたわ、この建物は呪われているから無理に泊まつて何が起きても一切文句は受け付けませんと。」

幼い外見のレニエルさんが冷静に返した事で男と一緒にいた迷彩姿の一人はたじろいだような顔をする物のもう一人は面白そうに顔を歪め、細面の男は尚も食い下がる。

もう結構遅い時間なのによくあの森を越えてきたと思う。良く見ればズボンの裾や靴は泥で汚れ服もよれよれ、半袖の腕には細かなキズが幾つも見えて顔も疲れている。けど良く見て見ると一人だけ、細身のカーボパンツに深紅の逆十字が刻まれた、半袖レザーシャツを着た男だけは疲れた様子が微塵も無い。短い髪をワックスで立てさせていて整つた顔だけど何か凄みが在る。鋭角的な形をした色の濃いサングラスがその凄みを強調させている。

細面に眼鏡の男は白を主とした地味な服装だ。どことなく気障でインテリっぽい雰囲氣はする。その後に長髪をひつつめて結わえた迷彩服の霞桜先輩ほどではないががつしり体形の男。靴も良く見ればジャングルブーツを履いている。言い表すなら一般人が想像する傭兵。

ただ一人、レニエルさんの応対に対して一人だけ鷹揚な顔を浮か

べているサングラス男だけが何か違う。

背が高く半袖のシャツから覗く腕は決して太くない物のガツチリと締まっている。私の直感が、長年の猫かぶりで築いた人物評価センサーが要注意の警報を大音量で鳴らしている。

「文句を言つ氣なんて無いわ、ただもう一度ココに僕達を泊めると言つているんだ。」

レニールさんが一つ嘆息をし再び口を開く。

いい加減堂々廻りになつてきただ会話に終止符を打つたのは玖韻先輩だった。

「レニー姉さん、泊まりたい言つんだから泊まらせてあげなよ。」

「でも…………玲音ちゃん…………」

「良いだろ、何が起きても文句は言わないって言つんだから、なあ兄さん等、何が起こるかと一切こいつは責任とらないけど構わないんだろ？」

突然玖韻先輩が話し掛けた事に少し驚いたような顔を細面と迷彩が浮かべるけど直ぐに細面の男が大きく頷く。

「…………分かりました。」

それを見てレニールさんも折れる。

「では宿帳のサインをお願いします。」

何時の間にか控えていた楓さんが宿帳を差し出し。三人がそれぞ

れ名前を書く。生憎ここから名前は見えない。

「では鍵をお渡ししますが、如何いたします？何かお飲みになられますか？」

折角の楓さんの言葉も無視して細面と迷彩は黙り取る様に、レザーシャツの男は丁寧な仕草で鍵を受け取る。足早にバーから出て行くかと思こいや急に足を止め玖韻先輩に細面が顔を向けた。

「お前僕達と逢った事が無いか？」

「フン、君等みたいな無礼者なんて知らんよ。」

ぐい飲みを傾けながら其方を見ようとせず鼻で嗤う玖韻先輩に細面の男の顔に怒氣が過るが後ろにいた迷彩におさえられ、玖韻先輩を睨みつけて足早に今度こそバーから出て行つた。

「…………何アレ？」

呆れたような声を出したのは太刀風先輩だった。

「無礼にもホドがありマース。」

「全くです、あーゆー手合いは少し痛い目に合わせた方が良いですね。」

キース、鶯淵先輩も憤慨している。

「…………」

霞桜先輩は酔いつぶれてテーブルにうつ伏せに突っ伏している。鼾どころか寝息も聞こえず時々びくびく動くのがなんか怖い。

「それで、結局今の三人つて何だつたんですか？」

「そうなんだ。さつき紅葉さんが連れてきた三人組みは結局のところ誰なのか、それが聞きたい。」

「実はね、あの人達去年ココに泊まつたお客様さんなの。」

少し困ったような顔をしてレニエルさんが話を始める。

レニエルさんの話を簡単に纏めればこう言つ事だ。去年の夏、とある伝手でココを尋ねてきて興味半分に泊まつた結果6人で来た内の一人が変死、一人が行方不明のまま幕を閉じたそうだ。現役の大学生が一人おかしな事になつていてのだからもつと騒がれても良い筈だが、喧騒を嫌うココの常連客で少々各方面に影響力の強いお客様さんがもみ消してしまつたらしい。

「きっとあの子達意趣返しのつもりできたんじゃないかしら。」

レニエルさんが何事もないかのよう言う。玖韻先輩が言つていた通り変死自殺させて数百件ともなればもう慣れてしまつているんだろう。全く慌ててている様子もない。先輩方も皆心臓に毛が生えているどころか心臓が炭素鋼やチタン、動脈はナノカーボンチュークで出来ているような人達だ。私以外誰も気にしないらしい。私はちょっと引いている。

「なんか白けちゃつたわね。」

太刀風先輩のその言葉で今日の所はお開きとなつた。今夜はもう

呑み始めてしまったし、皆疲れているだろうし霞桜先輩も酔いつぶれてしまった事を考慮してこのゲームは明日の午前中からと言つ事になった。

桜さんは明日の朝食係と言つ事で残念がりながら部屋に戻り、紅葉さんはもう暫く飲む様子の玖韻先輩と太刀風先輩と鷺淵先輩の酒豪トリオに付き合つと言い出し、私とキース先輩それにレニエルさんと楓さんは一階の喫茶室に移動して温かいアプリコットティーでもという話になつた。

誰も霞桜先輩を気にかけようとする様子は無く、ただ桜さんが何処からか持つてきた新聞紙を掛けていたけど結構涙を誘つ姿だ。どうか何で新聞紙……

そりや夏だから風邪はひかないかもしないけど……ウチのサークルって友情があるようでいて無いのかも。

私もせめてうつ伏せの状態だけでも何とかしてあげようかなと思つたけど、朝散々言われた事を思い出して止めた。

喫茶室に移りマフィンを摘み、楓さんの煎ってくれたアプリコットティーを一口。幸せな気分だ。

「ミスレニエル、良かつたら去年あつた事をもう少し詳しく教えて下さい。」

「あつ私も聞きたいです。」

レニエルさんと楓さんが顔を見合わせ苦笑めいた笑みを浮かべた物の「ではお茶菓子の代わりにお話しましょつか」とテーブルの紙ナップキンを一枚広げると何人かの名前を書く。
書かれた名前は全部で六人、右の方から比良坂湊、片桐悟、火光真冬、御厨美柚、間宮信士、高原詩遠。名前からだと男性か女性か判断しにくい名前が数人いる。

「去年ある人の紹介で泊まりに来たのがこの六名の方々です。先ほど私と話していたのが片桐悟様。その後にいたのが間宮信士様。もう一人の方は始めて見るお方でした。」

「宿帳には久我裁響くがたちひびきとかかれておられます。」

楓さんが宿帳を捲りながらそう言つた。レニエルさんはペンで片桐、間宮両名の名前を丸く囲んでいる……いまさらつと個人情報漏洩しなかつたかな？

「この紙に書いてある順番で、比良坂様が一階壹號室、片桐様が一階貳號室といったようにお泊り頂き高原様だけは二階參號室に泊まつて頂きました。」

「ナンデ一階の陸號室と二階の壹號室、貳號室には泊まらなかつたんデースカ？」

「その日は個人的なお客様がいらして二階の壹號室と貳號室に泊まつていただいていたのです。一階陸號室はちょっと諸事情がありました。」

「何時の間にか飲んでしまつたらしく空になつていた私のティーカップにアブリコソーティーのお代わりを入れてくれた。」

「皆様が宿泊された次の日の事です。一階參號室に泊まられた高原様が失踪いたしました。部屋の鍵も窓の鍵も、出入りできる可能性のある所の鍵は一切掛けたまま密室状態からの失踪でした。お泊りになつた皆様と私達従業員総出で地下から屋上、周囲の森まで捜索しましたが結局見つからず今現在も行方知れずのままでます。」

レニエルさんがペンで「高原詩遠」の上にバツを書く。

「本館の方は調べなかつたんですか？」

「去年本館は改修工事の為一切立入が出来ないよう処置してありますから、間違つても本館に入つたという可能性はありません。それに改修工事が終わつてから本館も調べられる限り調べましたけれど、結局見つかりませんでした。」

「アノ、警察は？」

レニエルさんがふるふると首を振る。

「……、忘我邸及び眩暈館は世俗に疲れた方々が多数御出で下ります。その為ココでは一切の通信器機が使用出来ないようになります。もし携帯電話を持つておられましたら画面を見て下さい。」

言われてポケットから携帯を引っ張り出して適当に電話を掛けてみようと思つたけど液晶には圈外の文字が浮んでいた。

「ソレデハ、もし急病とが出た場合は？」

「ご心配無く、楓は医師免許を持っています。専門は内科、外科、皮膚科、レントゲン科、放射線科、肛門科、耳鼻科、泌尿器科、眼科、耳鼻咽頭科、整骨、整形外科、産婦人科、小児科、消化器科、一人で殆ど、肉体的な損傷に関してはどうにか出来ますから。」

楓さんが恥かしそうに頬を染めて俯く。

それ以前に今レニエルさんは物凄い事をさらりと言つたんじやないだろうか？

「もじじびしても外部に連絡が必要な場合は特殊な訓練を施した伝書鳩がいるので心配なさらないで下さい。」

「口とレニエルさんが微笑む。

それにしても可愛い。

「さて、話を続けます。高原さんが行方不明になつたその日。残つた5名の方は意地でも探すと言ひはりもう一晩宿泊する事になりました。結局その日皆様は夜遅くまで探していらつしゃいましたが見つからずそれぞれ自分の部屋に戻られ過ごされました。」

レニエルさんがアプリコットティーで口を濡らす。

「次の日の朝です。今度は火光様が死体で発見されました。朝になつても音沙汰が無いので昨日の事もあり私も一緒に泊りになつた皆様で火光様の様子を見に行つた所高原様と同じ用にドアも窓もしつかりと施錠された密室状態の部屋の中で事切れておりました。」

「死因は何だつたんですか？」

今まで黙つていた楓さんが口を開く。

「自分で言つのもおこがましい話ですが、私が見たところ絞殺か扼殺だと思われました。死因は窒息死だと思われるのですが、はつきりとした事は言えないのが残念です。」

「ナゼ恐らくナノテースカ？」

「実は死体に首が無かつたんです。」

レニエルさんが苦笑を浮べる。

「ベッドの上で火光さんは胸の上で手を組んでいました。首から下は綺麗なものでしたけど、首はボロボロでした。刃物で切ったと言うよりも無理矢理引き千切つたような感じで骨も組織もボロボロ、首の皮膚は引っ張られたのかべろんと伸びていました。」

お願いだから笑顔でこう言つ事を言わないで欲しい。

「ソレデ……頭は？」

「多分相良様も虚祁様も本館の前で大鳥居をご覧になられたと思いますが、その上に乗つてたようです。実は首は最初見つかりませんでした。片桐様達が帰られて暫くした風の強い日に上から落ちてきて始めて首は大鳥居の上にあつた事が分かつたのです。酷い有様でしたよ。夏の最中でしたからどうどろに腐つた上に鳥に啄ばまれて、しかも落ちた所が石置の上でしたので衝撃で頭蓋骨は割れて腐肉が飛び散つて。掃除が面倒でした。」

「オオ、ソレは『苦労サマデス。』

掃除がどうこうと言つレベルの話じゃない。どうも私の感覚とレニエルさん達や先輩方の感覚には大きな溝が在るみたいだ。

「シカシ、どうして落ちてきた頭がミス火光のモノだと分かつたのでデスカ？」

「簡単な話です、実際に合わせてみましたがから。」

「…………何をですか？」

「火光様の遺体は地下にある冷凍施設で冷凍保存していましたので、無事だつた首の骨を合わせて見た所合致しました。」

「ちよ、ちよっと待つて下さい。」

今レニエルさんは妙な事を言つた。

何故火光さんとやらの遺体を冷凍保存していたと言つのだろ？

「勿論ちやんとした理由があります。」

私の顔を見て疑問を悟つたのかレニエルさんがその理由を話してくれる。

「まず、火光様が天涯孤独の身の上だと言う事でした。だからと言つて勝手に荼毘にふすわけにも行かないで暫く冷凍保存しようという話になつたのです。この事に関してはその日泊まつていた皆様からも了解をとつてあります。それにコレは個人的な事なのですが、どうせ荼毘にふすなら五体満足な形として上げたいと思つたのです。何しろココはそういう事故が多いものですから私の先代総責任者が地下にモルグを設えたのです。」

レニエルさんと考へが通じそつた所を見つけて私は内心ほつとしめたのも束の間「燃料費もタダじゃないですから。」という楓さんの言葉に頷くレニエルさんにがつくりと頃垂れそうになつた。

キース先輩が3杯目アプリコットティーを貰いレニエルさんの話を急かす。

「ソレでその後ドウナリマシタ？」

「コレで終わりです。」

「終り……デスカ?」

「私達が火光様の遺体を地下のモルグに運び、上がつてくると書置きと宿泊料金を残して誰もいませんでした。きっと限界だったのでしょうか。」

レニエルさんが話し疲れたのか背もたれに身体を預ける。

「デハ犯人とか」

「ええ、一切分かつていません。犯人も、動機も、殺害方法も、密室の作り方も、首の切断方法も、その首をどうやって大鳥居の上に置いたのかも、高原様がどこに失踪したのかも、全て闇の中です。」

そういつて再び二ゴリと笑う。

「ここで二ゴリと笑えるレニエルさんの神経に私はぞつとする。

「でも安心して下さい、ここではこんな事珍しい事じやありませんから、寧ろ大人しい方です。記録に残る中で一番酷い物は一晩で四十人が血肉の塊に変えられましたから、そちらの方も全て不明ですけど。」

今更だけど帰りたくなつてきた、でも夜にあの森を越える度胸は無いし。どうしよう、身の危険を感じるけど太刀風先輩の部屋に泊まりに行こうかな……行つたら行つたで別の意味で怖い目に逢いそうな気がする。いや氣がするじやなくて怖い目に間違いなく遭われる。

ああ、私はどうしたら良いんだ？

「デモそんな事があつたのに良くまたミスター片桐達はキマシタネ。

」

私の苦惱なんて知る由もないキース先輩が4杯目のアブリコットティーを貰いながら…………って良く飲むなあ…………

「ええ、私も少し驚いています、それにあの久我裁と宿帳に名前を書かれた方、只者じゃありませんね。」

レニエルさんの目がキラリと光る。

「ミーも同意権デース、あの目付きといい足運びといい素人の動きじゃアリマセン。」

キース先輩の目もキラリと光る。

言動は怪しいが巻き藁五本を一太刀で両断する居合切りの達人としてのキース先輩の目は本物だ。

見た事はないが聞いた話だと木刀で真剣を切つたり、真剣で自動車を両断した事もあるらしい。何故そんな場面になつたのかは聞けない。

私も最初嘘だと思っていたけど一度割り箸でスチール缶を両断するという妙技を見せられてからは強ち嘘とは思えない。因みにキース先輩には何処で誰に付けられたのか知らないけど「剣聖」なんて二つ名があるらしい。武器を持つたら先輩方の中でも1位2位の強さは間違いない。

因みに素手で一番強いのは霞桜先輩だ。打撃も恐ろしいけどそれ以上に捕まれば次の瞬間投げらるか折られるか極められるか外されるか、五体満足ではいられない。これまた何時何処で誰に如何し

てどんな状況で付けられたのかは一切不明の一「一つ名」「武神」^{ドッポ}は伊達じやない。しかも必殺技とか生身の現実でいわれるどジョークのようここにしか聞こえない技もあるといつ。

……初めて聞いた時は余りにも痛いジョークだと思った私に罪は無いと思う。

しかし、何で玖韻先輩も鷺淵先輩もキース先輩も霞桜先輩も太刀風先輩も頭脳と戦闘に関しては向かう所敵無しといった感じなのに他の部分はアレなんだろう?バランスをとっていると言えばそれでだが、もう少し人格とか性格の方にパラメータが寄せばざぞかし立派な人達だろうなと多くの人が思っている事は周知の事実だ。それにしても私ももつと頑張つて先輩方みたいに「一つ名」で呼ばれぐらいの実力を身につけるべきなのだろうか?

「どうかおかしいよね、何で皆戦闘前提何だらう?」

「虚祁様?」

「はつはい!」

楓さんに呼びかけられ私は夢想の世界から戻つてくる。

「もう一杯如何ですか?」

「いえ、もう十分頂きました。」

白磁のティー・ポットを差し出してくる楓さんを丁重に断る。どうもレニエルさんの話を聞いている内に結構沢山飲んでいたみたいだ。お腹がタボタボ言つてゐる。

……つら若き乙女にあるまじき行動だったかも。きちんと猫を被りなおしておこつ。

「オヤ、もつこんな時間アスカ？」

キース先輩の声に私も時計に手を向ける。時刻は一時を過ぎようとしている。

「ミスレーハル、ミス楓こんな時間までスイマセンでした。」

キース先輩が頭を下げる。鷺淵先輩に続いてマトモで紳士的なキース先輩だけの事はある。全く嫌味の無い仕草だ。

「いえ、構いませんよ私達も楽しい時間を過ごせましたから。」

レーハルさんがこれまたそつのない返答をして深夜のお茶会はお開きとなつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3175p/>

忘我邸にて

2011年10月8日12時31分発行